

清末教科書『音楽学』にみる唱歌の受容と変容

呂 政 慧

はじめに

中日における唱歌の定義

「唱歌」とは何か。現代の中国語で、「唱歌」(chàng gē)は名詞ではなく、「歌をうたう」という意味の動詞である。しかし、清末民国期においては学生に歌わせる曲付きの歌を「楽歌」あるいは「唱歌」と呼んでおり、名詞としての用法があったことが分かる。また、清末から民国初期にかけて中国の「新式学堂」^①では「楽歌」と「唱歌」の区別が不明確なままに使用されていた。当時の音楽科目は

「楽歌」科と呼ばれることもあれば、「唱歌」科と呼ばれることもあったのである。しかし、「楽歌科」も「唱歌科」も、「単音唱歌」(単旋律唱歌)あるいは簡単な複音唱歌(混声合唱曲)、唱歌教授法を教えるのが授業の主な内容であった。一九五九年に中国音楽家協会・中国音楽研究所が編纂した『中国近现代音乐史教学参考资料 第一編 (1840-1919)』^②では、清末の新式学堂で教えた「楽歌」(唱歌)を「学堂楽歌」と称しており、それ以降「学堂楽歌」という音楽用語が度々使われるようになり、中国の音楽界で定着した。^③

「学堂楽歌」が具体的に指すのは、清末から民国初期にかけて新式学堂で開設した音楽の授業とその授業で教えた歌である。

学堂楽歌は外来の曲に新思想を反映する歌詞を入れ替えることで、我が国の伝統音楽と一線を画す新しい音楽を構成した。ゆえに、我が国の近代音楽の発端といえる。⁽⁴⁾

上記の張静蔚の定義によれば、「学堂楽歌」の時代範囲は「清末から民国初期まで」である。しかし錢仁康は、「学堂楽歌」の範囲を清末から一九三〇年代まで広げた。一九三〇年代においても中国人が編纂した学校唱歌集や音楽教科書には、清末と民国初期の各種の唱歌集と同じ特徴（外国曲を取り入れること、文語と口語の兼用、西洋音楽様式をモデルにすること）があるからだといふ。⁽⁵⁾

日本には伝統音楽の用語「唱歌」⁽⁶⁾の他に、近代的な音楽用語としての「唱歌」⁽⁷⁾がある。本論と関わるのは後者である。金田一春彦は「唱歌」という極めて日本的な言葉と対応する西洋語は存在していないと述べているが、『日本音楽教育事典』ではこの主張が批判されている。⁽⁷⁾『日本音楽教育事典』によれば、「唱歌」⁽⁸⁾という言葉は、中国経由の言葉であり、もとの言葉はChant、Singing、Gesangであろうという。かつての教会教育を土台とし、日本で教育学と師範学校を媒介に生まれ変わろうとしていた教科だったのである。学制の教科目成立にかかわってその後一般化し、動詞としての性格と名詞としての性格の両方があったと説明されており、日本の「唱歌」教育と西洋の教会教育「Singing」との関連性が見出されている。また、

西洋においては、「Singing」とは初等教育つまり庶民の為の教会教育での中核の1つである。宗教教育としてのSingingつまり『堅信のための教義学習』における歌唱指導が唱歌であった。⁽⁹⁾宗教教育と関連しながら実践された「Singing」と、ヨーロッパで哲学の論理として高等教育で取り扱われる「Music」とは別のものであるという。⁽¹⁰⁾堀内久美雄が編纂した『新訂標準音楽辞典』では、「唱歌」は日本人に長い間「教科名」として認識されていたと説明している。「1872（明治5）年学制発布のさい、小学校の1科目として〈唱歌科〉が設けられたが、それ以来1941（昭和16）年国民学校が発足するまでの長いあいだ、唱歌といえは学校における音楽の授業をさした」⁽¹¹⁾。また、江崎公子は『唱歌大事典』で「唱歌」の語彙史について古今の多数の辞典を調べた結果として、『唱歌』という言葉自体は漢詩の流入や雅楽と共に古くからあった。（中略）近代学校教育で「教科目」名として唱歌が登場して以降、『楽にあわせて歌をうたうこと。また、その歌』として使用された例のほうが多かった⁽¹²⁾と指摘している。

以上みてきたように、それぞれの指す時代の範囲には少しずれがあるが、中国の音楽界で使われている「学堂楽歌」という用語も、日本の音楽界で使われている「唱歌」という用語も、「学生に教える歌詞のある楽曲」という意味では共通している。しかし、注意すべきは「学堂楽歌」という用語は中国の音楽界で研究のために新た

に作られた用語であり、清末の音楽教科書や雑誌で多く使われた言語表現は「唱歌」であったことである。

唱歌教育の歴史

次に、戦前の中日における唱歌教育の歴史を概観する。

明治初期から一九四一年まで、日本の音楽教育では学生が皆で「唱歌」を歌うことを重視した。「唱歌」が日本で学校の教科として登場したのは、一八七二年八月、「学制」が頒布された頃であった。「学制」により、音楽は、小学校では「唱歌」、中学校では「奏楽」と示された。¹³しかし、「唱歌」も「奏楽」も、実施には至らなかった。¹⁴日本で最初の唱歌は、一八七七年に宮内省の雅楽局の伶人（楽人）によって作られた雅楽風の「保育唱歌」であった。日本の文部省が唱歌制作をはじめたのは、一八七七年の夏であった。文部省はアメリカのL・W・メーソンの『音楽掛図』第二巻の曲を日本語に翻訳し、これに讃美歌の翻訳や日本の数え歌などを加えて一八八一年に音楽教科書『小学唱歌集』初編を出版した。こうしてできた教科書を使って、日本全国で唱歌を教えることになった。¹⁵一九〇八年四月から実施された改正小学校令で唱歌科はやっと正科となった。¹⁶一九四一年までの日本の唱歌教育は、一八八一年の『小学唱歌集』初編の出版以降の「西洋音楽を重視した唱歌」の時代、日清戦争・日露戦争期の「軍歌調唱歌」の時代、一九一〇年からの文部省唱歌

の時代¹⁷というように大きく三つの時期に分けられる。

中国の唱歌教育は「アヘン戦争」以降の欧米人の中国への進出に伴い、一部の地域で創立された「教会学校」で「音楽」や「琴科」、「唱歌」（讃美歌を歌うこと）等の授業が行われたことから始まった。¹⁸

近年、アメリカの宣教師が中国山東省登州で作った教会学校「文会館」（一八七二年～一九〇四年）の卒業生王元徳・劉玉峰が編纂した『文会館志』（濰縣広文学学校、一九一三年）に収録されている「文会館唱歌抄」が発見された。この「文会館唱歌抄」の十曲の唱歌は、一八八〇年代～一九一二年の間に作られたと推定され、中国人が初めて西洋の讃美歌のメロディーを借りて作った「唱歌」と見做されている。¹⁹また、一部の「新式学堂」で招いた「日本人教習」（中国人にとつてのお雇い外国人）も中国人に「唱歌」を教えていた。しかし、教会学校の唱歌教育であれ日本人教習が行った唱歌教育であれ、中国人自身が行った唱歌教育ではなかった。

中国人自身が積極的に唱歌教育を行うようになるのは二十世紀初頭からである。一九〇一年、清朝政府により「清末新政」が行われ、西洋の学問を学ぶことが全面的に認められるようになった。一方で、「日清戦争」後、日本への留学がブームになった。そうした中で日本に渡り音楽を学んでいた沈心工（一九〇二～一九〇三年在日）、²⁰曾志恣（一九〇一～一九〇七年在日）、²¹辛漢、李叔同（一九〇五～一九一〇年在日）²²が帰国し、中国人による音楽教育が始まったので

ある。彼らは「新式学堂」で音楽教員を担当し、学生に唱歌を教え、音楽講習会を開き、雑誌で唱歌を発表し、楽理教科書や唱歌集を出版した。一九〇三年に出版された雑誌『江蘇』第七期に在日中国留学生曾志恣の「練兵」、「遊春」、「揚子江」、「海戰」、「新」、「秋虫」の六曲の唱歌が掲載された。曾志恣の編纂した『教育唱歌集』(一九〇四年)と沈心工が編纂した『学校唱歌集』初集(一九〇四年)は中国で初めて出版された唱歌集であった。これ以降、留学生により、学校唱歌集や楽理の翻訳書が数多く作られるようになった。中国人留学生は、日本の明治二十年代後半から三十年代前半の唱歌教育のモードを中国に導入したのであった。

しかし、彼らの唱歌教育の実践があつたにもかかわらず、正式に清朝政府が「音楽」を随意科目として設けたのは一九〇七年三月八日に頒布された「奏定女子学堂章程折」²⁴⁾によつてであり、必須科目として設けたのは「奏定女子師範学堂章程」によつてであつた。それによると、毎週一時間か二時間、教育内容は女子小学堂で「単音歌」、女子師範学堂で「単音歌」、「複音歌」、「樂器の奏法」が行われた。男子に「樂歌」という随意科目が課されたのは一九〇九年五月十五日に「学部奏請變通初等小学堂章程摺」²⁵⁾が頒布されてからであつた。民国の成立と同時に一九一二年十二月の「教育部訂定小学校教則及課程表」によつて、初等小学学校では随意科目として「唱歌」²⁶⁾週一時間、高等小学学校では随意科目として「唱歌」週二時間、

中学校と師範学校と本科では必須科目として「樂歌」週一時間もしくは二時間が設けられた。²⁷⁾

一九一九年の「新文化運動」の思想の潮流により、蔡元培が「美育」を提出し教育改革を求め、一九二三年六月には北洋政府教育部により新しい学制が頒布されて小学校の音楽科目は「唱歌」や「樂歌」から「音楽」に変わった。蕭友梅も音楽の授業時間を増やして唱歌だけでなく楽理と樂器の勉強も増やすべきだと提案した。唱歌だけを重視する「唱歌教育」の弊害を改正することが求められたのである。²⁸⁾また、専門的な音楽家が現れ出したため、かつてのような外国の曲に中国語の歌詞を当てはめた独自性を欠く歌よりも、中国人自身が作曲した歌が音楽教科書に多く収録されるようになっていった。

一方で、学生に歌を歌わせることは依然として普通教育における音楽教育に継承されていた。また、外来の曲に中国語の歌詞を入れ替えるという歌の作り方も、外国の歌を取り入れる際に現代でも使われている手法である。そのため、清末から民国初期までの唱歌教育、及びこの時期の唱歌制作を研究することは、現代でもしばしば行われている歌の翻訳を理解する手がかりにもなる。

先行研究の概観

近代の中日における音楽について先行研究では、ローカルの・完

結的・閉鎖的に音楽をとらえるのではなく、比較音楽・文化交流の視点が重視されてきた。例えば、塚原康子『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』⁽²⁹⁾、榎本泰子『楽人の都・上海——近代中国における西洋音楽の受容』⁽³⁰⁾、細川周平『近代日本音楽百年第一巻——音楽の衝撃』⁽³¹⁾などがそうした視点を持ったものとして挙げられる。

日本の唱歌研究は堀内敬三と遠藤宏の音楽史研究から始まった。

近代日本の唱歌の整理としては海後宗臣、井上武士、金田一春彦・安西愛子、大和淳二、安田寛ほか、齋藤基彦、江崎公子・澤崎眞彦らの仕事为代表的なものである。日本の唱歌教育の成立と展開については、山住正己、田甫圭三、中山エイ子、松村直行、嶋田由美らの著作がある。岩井正浩は、子供の文化として唱歌をとらえている。西洋音楽との折衷という角度から唱歌を論じた研究としては奥中康人の『和洋折衷音楽史』⁽⁴⁷⁾が示唆的である。また、東京音楽学校の歴史を辿ったものとして、『東京芸術大学百年史——東京音楽学校篇第一巻』⁽⁴⁸⁾がある。唱歌と近代国家の関係を論じたものとしては山東功、奥中康人、佐藤慶治などの研究がある。日本の唱歌と西洋曲との関係について論じたものには、安田寛、櫻井雅人、松本正などの研究がある。また、『唱歌の社会史』⁽⁴⁹⁾は個々の日本唱歌に纏わる歴史を当時の日本社会と照らし合わせて論じている。日本の唱歌事業に貢献した個別の音楽家についての研究には『音楽教育の礎——鈴木米次郎と東洋音楽学校』⁽⁵⁶⁾や『言文一致唱歌の創始者田村虎蔵の生

涯』⁽⁵⁷⁾などがある。

清末民国初期の唱歌についての先行研究は多い。まず、音楽史料の整理・復刻・年譜の編纂としては、中国音楽家協会・中国音楽研究所、張静蔚、俞玉滋・張援、孫繼南、陳建華・陳潔、錢仁平などの著作があり、清末民国の音楽教育に関する法令・言論の整理には章咸・張援によるものがある。汪毓和、陶垂兵、馮文慈、馬達、陳聆群、明言、馮長春、伍雍誼などの研究は中国近代音楽史の中に清末民国期の唱歌教育を位置づけている。中国近現代の音楽家の紹介は中国芸術研究院音楽研究所の『中国近現代音楽家伝』⁽⁷³⁾に詳しい。

劉麟玉と蔣英は中国の特定の地域における音楽教育の展開を論じている。陳淨野、谷玉梅、李岩などは、沈心工、李叔同、曾志忞といった唱歌をつくった先駆者たちを取り上げて論じている。羅伝開、張前、田島みどり、錢仁康、高嬋などの研究では、中国の唱歌と日本の唱歌の関係について論じられている。中でも張前は『中日音楽交流史』の第三部第二章において、メロディーが同一である十二曲の中日の唱歌を比較した。また、錢仁康の『学堂楽歌考源』は、清末以降に誕生した数多くの唱歌のメロディーに注目し、外国の曲との比較を網羅的に検証した大作である。その中で錢は、清末民国初期の中国の唱歌を、中国の音楽家が作曲した唱歌、中国の古い曲を借用した唱歌、日本の同時期の唱歌のメロディーを借用した唱歌、そのほか、ドイツ・フランス・イギリス・アメリカ・イタリア・

スペイン・東ヨーロッパ・北ヨーロッパなどの国・地域の曲から借用した唱歌に分類している。高嬋は『近代中国における音楽教育思想の成立——留日知識人と日本の唱歌』の第四章で、それぞれ異なった時期に編纂された沈心工の『学校唱歌集』と『重編学校唱歌集』を取り上げ、中国の留日知識人の音楽教育実践が日本から影響を受けたことを論じている。

しかし、以上の先行研究のいずれも本論で取り扱う『音楽学』の内容については言及していない。

一、中日音楽交流史における『音楽学』

一 一 『音楽学』の意義付け

中国国家図書館に所蔵されている『音楽学』（一九〇五年）⁸⁴は日本の鈴木米次郎と中島六郎の音楽の授業をもとに湖北師範生の陳邦鎮と傅廷春が共編した総合的な音楽教科書である。日本の秀英舎で印刷され、湖北学務処で発行された。楽理知識と唱歌の両方を兼ね備え、上編には西洋音楽に関する知識、下編には四十二曲の唱歌が収録されている。

幼稚園児・小学生・中学生に向けた唱歌集として読み解くだけではなく、師範学校の教員向けの総合的な音楽教科書である『音楽

学』の研究には以下のような二つの意義があると考えている。

一、『音楽学』は清末に中国人が外来の音楽文化を学び自身の音楽教育思想も盛り込んで著した多文化的なテキストである。日本の唱歌が中国の湖北省に伝播し、どのように受容されたかを理解するために重要な史料だと言える。『音楽学』は当時の湖北省で設立された省内最高の教育機構「湖北学務処」によつて発行されており、官的な力で湖北省内において流通したと考えられ、省内の音楽教育に貢献したと想定される。また、日本の音楽界からすると、当時の日本における外国人に対する音楽の授業で教えた内容が窺える史料でもある。

二、中国の唱歌教育の曙である清末に出版された多くの唱歌教科書のうち、『音楽学』は、中国人が初めて編纂して正式に出版された唱歌集である沈心工の『学校唱歌集』（一九〇四年）の翌年出版されたものである。早い時期に出版された唱歌集であるにもかかわらず、『音楽学』（一九〇五年）の内容を取り上げ論じた先行研究はまだない。

それ故に、同書の研究は近代の中国の社会改革を大きく推進した湖北省の近代音楽教育と日本の関係を考察するには不可欠なのである。

一一二 『音楽学』編者の日本留学と鈴木米次郎

『音楽学』の奥付に記されている編纂者「湖北師範生」とは、歴史教科書を研究する鈴木正弘によると、一九〇四年五月に湖北省が日本の弘（宏）文学院に派遣した「官費師範生」たちのことを指す⁽⁸⁶⁾。また、本文第一頁には「傅廷春・陳邦鎮共編」と書かれている。

『音楽学』の表紙にある「師範教科叢編 第十四種」という記述はどのような情報を伝えているのだろうか。ここで用いた「種」というのは教科書の種目という意味である。一種の科目で一冊の本になっている。鈴木正弘によると、「師範教科叢編」は、湖北師範生が「弘（宏）文学院」の教員の講義を参照して編纂した教科書で、一九〇五年一月より順次刊行された。その第一種、第三種、第九種、第十二種、第十四種の計十一冊が東京都立中央図書館に所蔵されている⁽⁸⁷⁾。第一種の『教育学』の最初の頁には「師範全班函録」（図3）が掲載されており、そこに記されている学生氏名には『音楽学』の編者である「傅廷春」と「陳邦鎮」の名前が見える。

また、王鼎の博士論文の付録「清末湖北留日学生名簿（一八九八〜一九〇四年）」によると、傅廷春は「字華甫、湖北沔陽出身、一九〇四年二月に東京に到着、官費留学生、弘文学院普通科に入学」した⁽⁸⁸⁾。更に、筆者は『清末民国初中国官紳人名録』（一九一八年）で、「傅廷春は前清の貢生にして曾つて日本の師範学校を卒業

し、帰朝後又湖北法政講習所を卒業し教育事務を歴掌せり。民国成立後曾つて湖北陽新縣署理知事となり第二期知事試験に合格し陝西に赴任し乾縣署理知事となりしが、六年十二月現在陝西咸陽縣試署知事たり」という紹介文を発見した。日本に留学していた彼が後に中国に帰って活躍したことが分かる。一方、「陳邦鎮」は字宜生、「別号梨村」、「一八七六年生まれ、湖北鄂城人、一九〇四年に東京に到着、官費で弘文学院に入学」した。一九二三年、中華民国農商部農林司の職員を務めた。こうした経歴と照らし合わせると、一九〇五年に発行された『音楽学』は彼らが日本に留学中に編纂されたと分かる。しかし、編者の二人はいずれも帰国後は音楽に携わる仕事をしておらず、それぞれ法政と農林の領域で公務員として活躍していた。編者二人の経歴は彼らの知識の幅広さを伝えている。

『音楽学』の第一頁には「日本 鈴木米次郎 中島六郎 講授」と書かれている。そのことから、日本人教員である「鈴木米次郎」と「中島六郎」の教えがなければ『音楽学』は誕生しなかっただろうことが窺われる。では、『音楽学』の編者と鈴木米次郎と中島六郎は具体的にどのように関わっていたのだろうか。『東京音楽学校創立五十年記念』の「卒業生及修了生名簿」には、「鈴木米次郎」が一八八八年七月に「音楽取調掛全科」を、「中島六郎」が一九〇三年七月に東京音楽学校の選科を卒業したことが明記されている。鈴木米次郎の年譜によると、「一九〇四年九月に嘉納治五郎

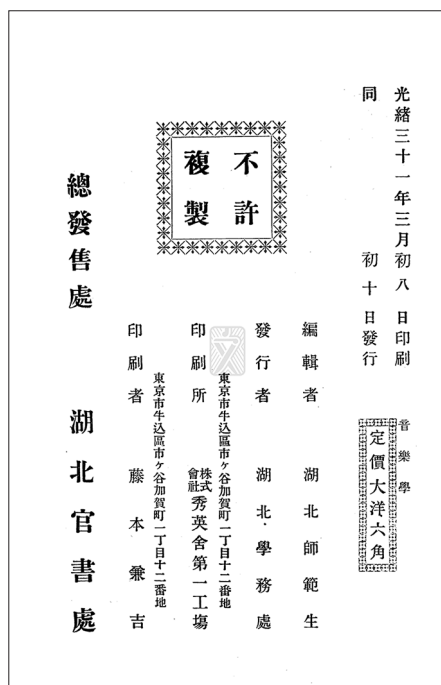


図2 『音楽学』の奥付

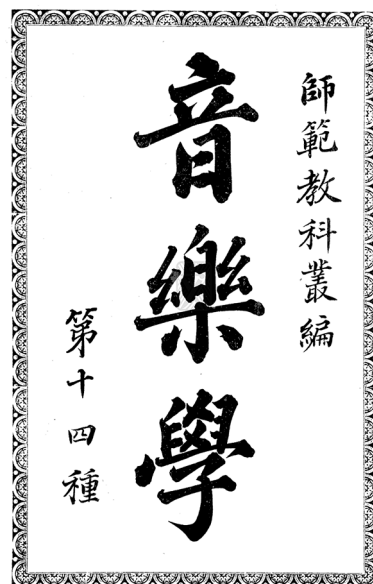


図1 『音楽学』の表紙

齒錄	邱岳	湖北黃岡	陶介人	湖北南漳	方作舟	湖北江夏
	陳芳	湖北南漳	歐陽覺	湖北南漳	屈佩蘭	湖北麻城
	馮應田	湖北南漳	呂樹森	湖北南漳	陳邦鑑	湖北武昌
	蕭金壽	湖北南漳	路黎元	湖北南漳	劉本樞	湖北武昌
	蕭汝復	湖北江夏	閔彥	湖北應山	金麟	湖北利州
	余肇升	湖南長沙	宋蟠	湖北大冶	周之冕	湖北大門
	徐大燾	湖北咸豐	色克圖	湖北利州	黃乾元	湖北孝感
	莫覃	湖南清泉	馬鳴謙	湖北公安	郭肇明	湖北竹山
	夏紹璣	湖南衡陽	順啓	湖北利州	胡庸	湖北孝感
	羅伯勛	湖南清泉	鄒永修	湖南新化	方士燧	湖南龍山
師範全班齒錄						
	陳炳炎	湖北應城	古文光	湖北長陽	簡郁書	湖北大門
	阮毓崧	湖北黃安	陳湘俊	湖南衡陽	范鴻準	湖北武昌
	陳化培	湖北遠安	劉騫	湖北大門	忠錦	湖北利州
	賀成達	湖南鳳凰	范維藩	湖北武昌	沈儀	湖北黃岡
	培達	湖北利州	胡鳳	湖北應城	胡楷	湖北漢陽
	李思純	湖北隨州	吳賜寶	湖北漢陽	王先庚	湖北武昌
	張藩材	湖北大門	黃雲鳳	湖北羅田	許光棟	湖北羅田
	恒璋	湖北利州	傅廷春	湖北漢陽	陳藻	湖北恩施
	金孝綽	湖北監利	沈增祺	湖北黃岡	張楚材	湖北大門
	陳思植	湖北東湖	劉人琰	湖北夏口	麟雨	湖北利州

図3 「師範全班齒錄」

日本波多野貞之助講義、閔彥・劉本樞・范鴻準・宋蟠・周之冕・屈佩蘭・邱岳・阮毓崧・陳化培合編『教育学』（師範教科叢編第一種）、湖北學務處、1905年。

（資料提供：東京都立中央図書館）

が開設した私立弘文学院の講師となる⁽⁹⁵⁾とあり、鈴木米次郎は「弘（宏）文学院」で音楽を教えていたことが分かる。更に、高嬋の論文でも鈴木米次郎が清末の中国人留日学生の音楽教育に貢献したことが言及されている。したがって、『音楽学』の編纂に影響を与えたのは「弘（宏）文学院」で湖北省の留学生に音楽学を教えていた鈴木米次郎であると明確に言える。更に、証明できる資料がある。

現在でも東京都文京区の「講道館」二階の資料室に保存されている貴重資料「宏文学院（一）」の箱には「弘文学院職員名簿⁽⁹⁷⁾」と「職員異動一覧⁽⁹⁸⁾」が収められており、そこには「鈴木米次郎」の氏名及びその就職・退職年月が記録されている。それによると、鈴木米次郎は一九〇四年十月に弘文学院の音楽科職員になり、一九〇五年十二月に退職したことがわかる。

傅廷春と陳邦鎮の経歴と照らし合わせてみると、二人は日本の「弘（宏）学院」に在学していた間に、鈴木米次郎の音楽に関する授業を受けながら『音楽学』を編纂したことがわかる。

一―三 『音楽学』の出版と流通

前節で言及したように、「弘（宏）文学院」の湖北師範生が編纂した『音楽学』を含めた教科書シリーズ「師範教科叢編」（計十四冊）は、東京都立中央図書館に十一冊所蔵されているが、筆者は中華民国時期の書物のデジタルアーカイブ「翰文民国図書文庫」によ

り、第二種の『心理学』と第十種の『生理学』を新たに発見した⁽⁹⁹⁾。したがって、「師範教科叢編」計十四種のうち十三種は、第一種教育学、第二種心理学、第三種倫理学、第四種教授法、第五種管理法、第六種学校制度、第七種法制経済学、第八種化学、第九種物理学、第十種生理学、第十二種動物学、第十三種植物学、第十四種音楽学であることが明らかとなった。つまり、『音楽学』は中国湖北師範生の手により、湖北省内の師範教科書の叢書の一冊としてつくられたのである。なお、潘世聖の最新の論文では『宏文学院講義録』（計十六科目、全三卷合本）の発見が報告されているが、それは蔭山雅博が言及した速成科廃止後の一九〇七年八月に「宏文学院」の教員たちが編纂した普通科の『講義録⁽¹⁰⁰⁾』であり、湖北師範生が編纂した「師範教科叢編」とは全く違う資料である。

『中国近代学制史料』（第一輯下冊）に収録されている師範学堂の情報によると、この時期の湖北省内では、「一九〇二年四月湖広總督張之洞が武昌で師範学堂を設立した。付属「東路小学堂」はそのそばにあり、師範学堂の学生が授業を行い、実習する⁽¹⁰¹⁾」とある。また、「師範学堂の学生は将来本省各府州県小学堂で教職に就く⁽¹⁰²⁾」ことを考慮すれば、この湖北師範生によって作られた教科書のシリーズは、師範生によって「東路小学堂」および湖北省内の小学堂の学生の教育に用いられ、伝播したものだと考えられる。

『音楽学』の奥付に記された印刷所「株式会社秀英舎」は、一八七六

年十月九日に「当時の東京府下第一大区八小区彌左衛門町十三番地ニ活版印刷ノ事業及設備ヲ創ム是即チ株式会社秀英舎」⁽⁹⁴⁾のことを指す。一九一〇年の「東京都牛込区全図」⁽⁹⁵⁾によると、東京市牛込区市ヶ谷加賀町一丁目十二番地は「秀英舎」の第一工場の敷地だった。したがって、当時の秀英舎（現在の「大日本印刷株式会社」）が近代中国の音楽教材の編纂に協力していたということである。清末の中国語はまだ繁体字（旧字体）で書かれており、明治期の日本語と共通した漢字が多いとはいえ、日本の印刷所で中国語の本が印刷されたことは驚くべきことである。発売所は「湖北官書処」とあり、教科書は日本で印刷され中国で発売されたことになる。

一四 「弘（宏）文学院」における唱歌教育

「弘（宏）文学院」についても少し触れておく。創設者嘉納治五郎の「宏文学院経営譚」によると、一八九六年、嘉納治五郎は中国公使の依頼を快諾して、中国人留学生に日本語と普通学⁽⁹⁶⁾の教育を行った。後に中国人留学生の数が増えたので、それに対応するために学校の設備を拡充させていき、遂には一九〇二年、東京の牛込区に「弘（宏）文学院」を設立したのである。講道館資料室所蔵の弘（宏）文学院関係資料「宏文学院（一）」の箱に収められている『宏文学院章程要覧』によると、一九〇二年頃には、学制は三年であり、第一学年では「修身」、「日本語」、「地理歴史」、「算数」、「理科」、

「体操」、第二学年と第三学年では更に「代数学」、「理科学」、「英語」、「植物学」、「動物学」、「図画」⁽⁹⁷⁾などが課せられていた。しかし、音楽に関する授業は設置されていなかった。一九〇三年以降「弘（宏）文学院」のキャンパスは徐々に増えていき、次第に速成教育に重心が置かれるようになった。⁽⁹⁸⁾『宏文学院一覽』（明治三十九年十月末日調査）によると、一九〇六年に、三年制の「普通科」以外に、「速成普通科」、「速成師範科」、「夜学速成理化科」、「夜学速成警務科」と「夜学日語科」などの多種多様な学科が設けられていたことが分かる。同じく「宏文学院（一）」に収められている「師範学校規則」（年代不明だが）によると、「唱歌」の授業では、第一学年と第二学年は「単音唱歌」が一時間、第三学年と第四学年は「複音唱歌」が一時間課されていた。⁽⁹⁹⁾つまり、弘（宏）文学院の「速成師範科」では「唱歌」が教えられていたのである。

また、「宏文学院（一）」から見つかった『弘文学院音楽班章程』（図4）によると、「弘（宏）文学院」では「速成音楽班」も設立されていたことが分かる。それによると、「速成音楽班」は毎週六時間、月・水・金曜日の午後四時から六時まで授業を行っており、速成音楽科の科目には前述の「速成師範科」にも設置された「唱歌」だけでなく、「音楽理論」と「風琴練習」も加えられた。また、その修業年限は一年間であり、試験に受かると卒業証書が与えられ、三か月以上学べば修業証書を得られる。更に、章程の第六条によれ

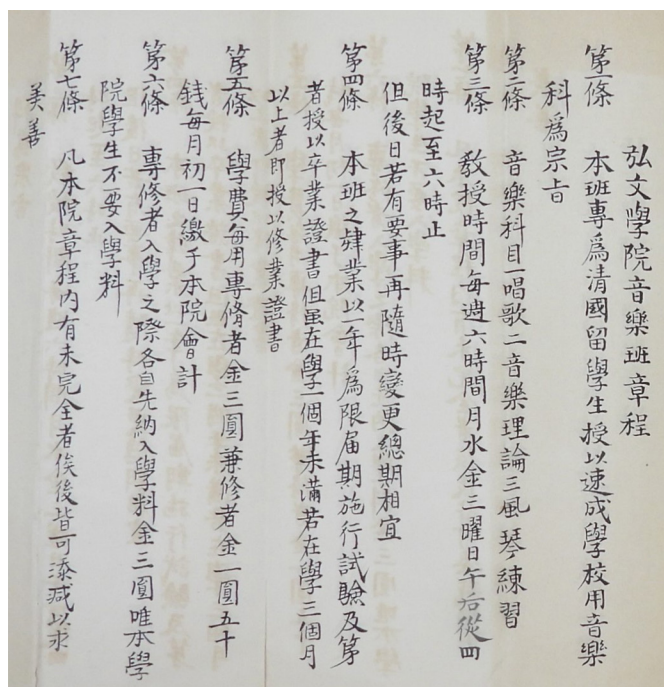


図4 『弘文学院音楽班章程』
講道館所蔵「宏文学院（一）」、資料番号なし。（資料提供：講道館）

ば、「弘文学院」の学生であれば、「速成音楽班」に無料で入学できるというメリットがある。したがって、「弘文学院」の「普通科」の学生も「速成師範科」の学生もここで唱歌と楽理知識を学んだことが分かった。

弘（宏）文学院で学んで卒業した学生のうち、陳邦鎮は本論で論じる『音楽学』を編纂しただけではなく、『歴史唱歌』（図5）の作

曲者でもあった。そのため、音楽教員でこそなかったが、音楽に対する高度な知識があったと考えられる。「弘（宏）文学院」での速成の音楽教育しか受けていなかったようだが、鈴木米次郎の教え方が良かったのだろうと推測できる。

また、講道館資料室所蔵の「宏文学院（四）」の箱に収められている「中国人書簡」の中に、賈豊臻という卒業生の進路について語られている書簡（図6）があった。

賈豊臻、年二十三歳、江蘇上海人、弘文学院第一期速成師範科を卒業した。帰国後、上海龍門師範学校にて教育科及び樂教科教員、又龍門師範附屬小学校校長を歴任し去年四月に日本を

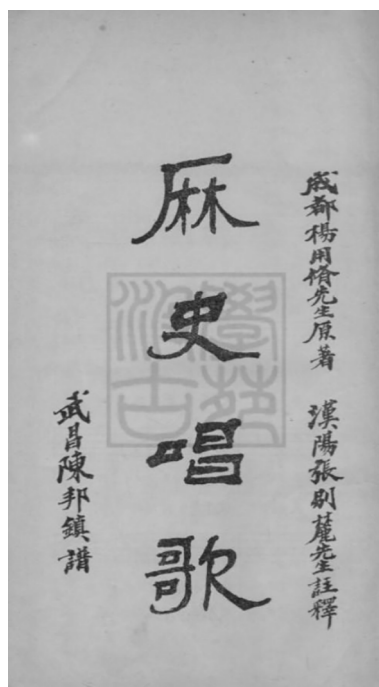


図5 『歴史唱歌』表紙（北京大学図書館所蔵）
楊用修原著、張別麓注釈、陳邦鎮作曲、出版年代不明、活字本。

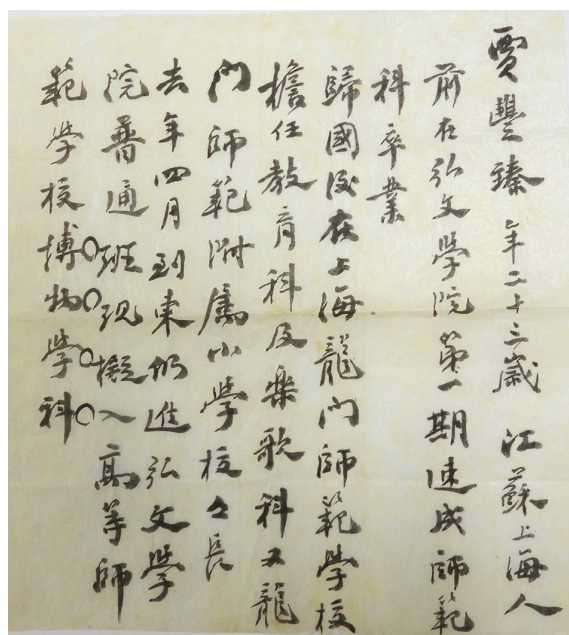


図6 「中国人書簡：賈豐臻」
講道館所蔵「宏文学院（四）」、資料番号なし。（資料提供：講道館）

再び訪れ、弘文学院普通班に編入学した。現在は高等師範学校博物学科に入学するつもりである。

僅かな資料であるが、この二人の卒業生が弘（宏）文学院で学んだ後、中国に帰って、唱歌本を編纂したり、唱歌科の教員になったりしたことからは、一九〇二年から一九一一年頃までの、「弘（宏）文学院」の中国人留学生に対する音楽教育の成果が窺える。

本章を整理すれば、湖北師範留学生傅廷春と陳邦鎮は、「弘（宏）

文学院」に在学していた時期、『音楽学』を作り上げたということになる。そのため、『音楽学』は当時の日本における中国人に対する唱歌教育の成果であつたと同時に、当時の中国人留学生が積極的
に外国の文化を学んだ成果でもあつたのである。

二、『音楽学』下編の唱歌と外国曲との関係

『音楽学』の下編の唱歌を分析する前に、上編の楽理について少し説明する。「凡例」には、『音楽学』を編纂する際に、日本人の鈴木米次郎、田村虎蔵、石原重雄、白井規矩郎、近森出来治などが編纂した音楽教科書を参照したと明記されているが、具体的な書名は示されていない。日本の国立国会図書館には、鈴木米次郎の『新編音楽理論』¹²、『音楽理論百ヶ条』¹³、『楽典大意』¹⁴、田村虎蔵の『近世楽典教科書』¹⁵、石原重雄の『新撰楽典大要』¹⁶と『新撰小学唱歌教授法』¹⁷、白井規矩郎訳述『唱歌教授法』¹⁸、近森出来治『楽典摘要』¹⁹などの楽理教科書が現存している。それらの本の楽理知識と『音楽学』の上編の楽理知識とを比較すると、直訳したものではなく、多様な音楽教科書を参照し楽理を理解した上で、上編の楽理知識を編纂したと推定できる。

『音楽学』の下編には、幼稚園唱歌十曲・尋常小学唱歌十曲・高等小学唱歌十曲・中学唱歌十二曲、総計四十二曲の五線譜と数字譜

両方を備える伴奏のない単旋律唱歌が収録されている。しかし、清末民初の中国では作曲著作権についての意識が薄かったため、中国語の唱歌集にはほとんどの場合、作詞者の名前しか掲載されていない。作曲者の情報は多くの場合掲載されていないので、一曲一曲検証しなければならない。

張前は中日の学校唱歌のメロディーの関係について以下のように述べている。「中国の学堂楽歌は日本の学校唱歌を手本とし、音楽面でも日本の学校唱歌から取ったものがたくさんある」⁽¹²⁾。また、張は日本の学校唱歌の影響を受けた中国の学校唱歌を二種類に分類している。「第一は、日本の唱歌の旋律を採用して、新しい歌詞をあてはめるものである」⁽¹²⁾。「第二は日本の学校唱歌を通して西洋音楽の旋律を採用し、新しい歌詞をあてはめた歌である」⁽¹²⁾。『音楽学』は日本と深い関わりのあつた湖北師範生が編纂した音楽教科書でもあるが、そこに載せられた唱歌も日本の唱歌のメロディーを借用したもののなかを検証したい。

そこで筆者は、東京芸術大学附属図書館、国立国会図書館、国立教育政策研究所教育図書館、神奈川県立図書館、横浜市立図書館に所蔵されている一八八二年から一九〇五年までに出版された日本の唱歌集を参照した。それらの唱歌集に収録されている日本の唱歌の一曲一曲の楽譜と『音楽学』の四十二曲の唱歌とを比べ、メロディーが同じであるものを抽出したのである。

それらは図7・8で示すように、個別の音符の変化、移調等が生じたケースもあつたが、変更せずにそのまま借用したものがほとんどであつた。

また、先行研究で述べられているように、日本の唱歌は西洋の音楽を学んで確立されたものである。そのため、日本の唱歌と西洋の曲の関係についても日本における洋楽受容史の先行研究がある。それらと照らし合わせながら更に、日本の唱歌のメロディーの源を遡り、表1（巻末）のような歌の受容関係表を作成した。

この表で示したように、『音楽学』の下編に収録されている四十二曲の唱歌の中で、明らかに日本の唱歌や軍歌から翻訳・翻案されたものと判明したのは三十七曲である。つまり、当時の湖北省の師範留学生在が編纂した『音楽学』の唱歌は、その八割以上が一八八二年から一九〇四年までの日本の唱歌や軍歌の歌詞を翻訳・翻案してできたものであつたのである。

詳述すると、文部省音楽取調掛編纂の日本初の『小学唱歌集』（一八八一〜一八八四年）の唱歌からは六曲、文部省音楽取調掛編纂の日本初の官製『幼稚園唱歌集』（一八八七年）からは三曲、鈴木米次郎の編纂した唱歌集『日本遊戯唱歌』（一九〇一年）からは二曲、『中学唱歌集』（一九〇二年）からは一曲、東京音楽学校編纂の『中学唱歌』（一九〇一年）からは十八曲、日清戦争と日露戦争前後に流行した日本の軍歌から二曲、他の唱歌集から五曲、計三十七曲の日

楽譜の比較の例：「雪」と「君が代」

君 が 代

君 が 代
サ ヤ レ イ シ ノ イ ハ ホ ト ナ リ ナ
コ ケ ノ ム ス マー マー

雪

C 調四拍子

幾 日 朔 風 一 吹 雪 花 飛 飄 來 片 々
力 何 微 瓊 蕊 兒 縱 然 無 香 色 却 備 一
直 壓 倒 嶺 上 寒 一 梅 一

図8 林廣守作曲『君が代』の楽譜

奥好義編『儀式唱歌——附祝日大祭日唱歌』寛裕舎、1893年、14頁、10コマ。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/855104>（最終閲覧日 2023年10月31日）。

図7 「雪」の楽譜（『音楽学』124頁）

本の唱歌が翻訳・翻案されている。

『中学唱歌』の唱歌からの翻訳・翻案が最も多いのは、明治期の日本唱歌教育の変遷にかかわるだろう。つまり当時は、西洋の讃美歌や、民謡のメロディーをそのまま借用して作られた『小学唱歌集』（二八八—一八八四年）、『中等唱歌集』（二八八九年）等が次第に教育現場で批判されるようになり、日本人独自の作曲が主である『中学唱歌』（一九〇一年）が作られ歓迎された時期であったのである。松本正の論文では、『中学唱歌』の作詞者・作曲者が検証され、『中学唱歌』は外国曲に歌詞付けするという、伝統的な唱歌創出の在り方から脱却して、日本人が作詞・作曲した作品によって構成される新たな教科書である¹²⁾と結論づけられた。当時の湖北師範生たちの在日期间が一九〇五年前後であったことを考えれば、ちょうどその時期には日本人によって作曲・作詞された『中学唱歌』が日本の中等教育の現場でもはやされており、彼らもその影響を受けやすかつたのではないか。また、東京音楽学校を卒業した鈴木米次郎は、授業で多くの『中学唱歌』の唱歌を湖北師範生に教えたとも考えられる。

またこの四十二曲には、元歌が判明しなかったものが四曲、日本の『中学唱歌集』に収録されている英語の唱歌から直接翻案したと考えられるものが一曲ある。更に指摘しなければならないのは、日本の唱歌や軍歌から翻訳・翻案した三十七曲の唱歌のうち、日本人

が作曲且つ作詞したものは二十八曲ある。それ以外の九曲は、遠藤宏⁽²⁵⁾と齋藤基彦⁽²⁶⁾の研究によれば、表1の右の列に示したように元々十七世紀から十九世紀の西洋の曲である。

以上の照合作業から、『音楽学』収録の唱歌の受容関係が明らかになった。『音楽学』に収録されている学校唱歌は、西欧（讚美歌、民謡）―日本（唱歌）―中国（唱歌）といった歌の間接的な受容よりも、日本人の創作した唱歌からの直接受容が主流であったと結論づけられる。

日本の唱歌からの受容が多かった潜在的な原因としてまず考えられるのは、明治期における日本の「唱歌」は「德育」との関係が重視されていたことである。伊澤修二は「音楽取調成績申報書」で児童に教える歌は「快活優美にして、風致あり、善く人を正路に導き、自ら其心の邪穢を去るに足るべきものを以て妙⁽²⁷⁾」と述べている。その方針で、德育に資する唱歌が多く作られ、子供に教えられた。日本の唱歌教育は、その確立された時期において、すでに「徳性の涵養⁽²⁸⁾」や「風教教育」と密接な関わりをもっていたのである。一九〇一年に中国では「欽定学堂章程」が頒布され、「日本型」教育制度が中国に導入された⁽²⁹⁾。一九〇五年の「湖南蒙養院教課説略」（湖南幼稚園各教科目説明）では、「唱歌はその音響やリズムを以て精神を育成し、歌詞を以て舞踏の中で筋肉を動かし、歌の意味を以て豊かな感情を育てる。国民の「忠愛」思想なるものに影のように寄り添う

ものであつて、これこそ感化教育の大元であり、ゆめゆめなおざりにしてはならない。」と述べている。また、唱歌集の序言にも、「唱歌」は「国民の『忠愛』思想」を育てるのに役に立つという思想が表れている。「日清戦争」で日本に負けたために当時の中国では「西洋よりも日本」に学ぼうという考えが有識者の間で生じており、中国の留学生たちは「明治維新」によって近代国家として成り立つた日本に学ぶ際に、国民の德育のために歌詞が工夫された日本の唱歌を自国に導入したのではないだろうか。

三、『音楽学』の「翻訳・翻案唱歌」からみる歌詞の変容

第二章で『音楽学』に収録されている四十二曲の唱歌のうち、三十七曲の唱歌が日本の唱歌のメロディーに歌詞を付する方法で作られたものであつたことを論じた。それらの歌は当然のことながら、元歌とはメロディーは一致しているが歌詞は異なっている。王敏『日本と中国―相互誤解の構造』に述べられているように、「文化は伝播によって変わっていく⁽³⁰⁾」ものである。留学生によって伝えられた日本の唱歌が中国側のニーズによってどのように変容したのかを究明することは音楽研究の大きな課題である。日本の唱歌のメロディーを借用した『音楽学』の唱歌には、日本の唱歌からそのまま受容した部分もあれば、変容させた部分もある。そうした変容の様

相こそ文化伝播の魅力だと思われる。そのために、本章では、『音楽学』に収録されている、日本の唱歌のメロディーを借用した三十七曲の「翻訳・翻案唱歌」を取り上げ、元歌の歌詞とを比べることで、その歌詞の違い、延いては歌詞に潜む思想の違いを探りたい。

三― 歌詞が翻訳された「翻訳唱歌」

外国の元歌のメロディーはそのままに、歌詞が翻訳（意識も含めて）された唱歌を「翻訳唱歌」と定義する。したがって、『音楽学』の四十二曲の唱歌のうち「翻訳唱歌」は十二曲となる。具体的には、自然の風景を歌う「秋」「春」「川流」「太平洋」、日常生活を歌う「明日日曜」「運動會」（中学唱歌）「暑假」、勉学に励むことを歌う「螢」「雞」「朝起之鐘」、愛国心を育てるための「雪中行軍」と「驥」である。

以下、適宜に「翻訳唱歌」の例を挙げながら元歌と比較する。

【例一】

太平洋（『音楽学』一二三頁）

（一）太平洋、亞洲東部、極目何汪々、
雲煙際、來去許多帆檣、衝巨浪、
眞个是、汽船如梭、織出文明象、

講什麼、歐山美水、進化便稱強、

（二）太平洋、蓬萊島上、一望何湯々、

廣而深、多少鯨鯢魷、應潛藏、

南北極、一水森茫、並無多少屏障、

問何年、龍旗甲艦、海上威武揚、

太平洋（『中学唱歌』二十頁）

第一章

北は眞北の限りまで、南は南盡くるまで

西半球を堺して、太平洋はひろがれり

第二章

波たひらかにはても無く、空につらなる深緑

鏡の如き海の上に、櫻花咲く大八洲

中国の唱歌「太平洋」と日本の唱歌「太平洋」はどちらも前半の歌詞が太平洋の広さを表現している。ただ、日本の唱歌「太平洋」の最後の歌詞「鏡のごとき海の上に櫻花咲く大八洲」（大八洲は日本の古称）には、自国が海に囲まれた島国であることを小学生に意識させようとする教育側の意図が見られる。それに対し、中国の唱歌「太平洋」は、欧米の「汽船」が行き来している太平洋の近代文明的な風景を描き、そしていつの日か欧米諸国のように清朝の「龍

旗」が海上に翻ることを願う内容になっている。そこには、憂患の意識を中国の小学生に教えて学生を激励する教育側の意図が見られる。

【例二】

運動會（『音楽学』中学唱歌二三九頁）

（一） 縱然有德育智育、體育不可少、

兵式操遊戲體操、熟練自然高、

精神活潑勇可買、養成天機妙、

大家開個運動會、比々本領好、

（二） 高牽著萬國々旗、五彩風中搖、

唱一個愛國歌兒、志氣分外豪、

彼此競技如臨陣、尚武志不小、

芳草萋々綠十里、看誰奪錦標、

運動會（『中学唱歌』四〇五頁）

第一章

勇む 意志の 種々を

風に 表す 旗章

並列が 岡に 屯集して

各々の 技倆 競争べむ

第二章

赤は 旭日に 比成し

青は 若葉と 映出なり

靡かす 旗に 氣も勇み

白黒 分かつ 時をまつ

第三章

待ちに まち得し 運動會

いでや 今日こそ 誰が名譽

一二三の よび聲に

五色の 旗は わかれたり

『音楽学』の「運動會」（中学唱歌）と日本の「運動會」はいずれも同じ中学校の運動会で技量比べをしている様子を描いているが、『音楽学』の「運動會」（中学唱歌）の歌詞には「愛国」や「尚武」といった言葉遣いが特徴的である。西洋について学ぼうと日本に渡った中国の留学生が、日本の児童の精神的高揚に刺激されたためではないだろうか。一九〇六年に発行された江蘇師範生編纂の音楽教材『音楽体操（附參觀筆記）』の付録「參觀筆記」には、日本の各学校を見学した当時の江蘇師範生の経験が記されている。そこには、一九〇五年六月十日に小石川市立第二尋常小学校を訪れた際に運動場を見学し、そこで唱歌をしながら体操をしている日本の学生

を目にしたことが書かれており、その澆刺とした様子を「歩調一致、

精神活発」⁽³³⁾と賞賛している。湖北師範生も江蘇師範生と同じような

経験をして当時の日本の小中学校の生徒の様に感動した可能性は

あろう。『音楽学』で日本の唱歌「運動會」を選んで、「愛国」「尚

武」といった歌詞に組み替えていったことの背景にはそうしたことが

あったのかも知れない。一九〇四年、近代中国の代表的な知識人

である梁啓超は著作『中国之武士道』で、日本の「武士道」という

言葉を借りて中国人の「愛国」「尚武」を唱えた⁽³⁴⁾。武を重視する先

人の事跡を述べて評価し、当時の中国の精神教育における欠点を補

おうとしたのである。この著作が当時の留日音楽生にも影響を与え

たと推測できる。なぜならこの「運動會」だけではなく、梁啓超の

『中国之武士道』に出てくる中国の歴史上の人物「魯仲連」もこの

『音楽学』の中学唱歌の第七曲「魯仲連」となっているからである。

このような唱歌は清末の「軍国民運動」に深く関わっていると考え

られる。

この二つの例を見て分かるように、「翻訳唱歌」であつても、完

全な直訳ではなく、部分的な翻訳、あるいは意識が行われていた。

もつとも、歌詞における部分的な相違によって、歌の全体的な意味

が違ってくる場合もあることは否定できない。

三二 歌詞が完全に入れ替わった「翻案唱歌」

外国の元歌のメロディーはそのままに、歌詞が完全に入れ替わつ

た唱歌を「翻案唱歌」と定義する。したがって、日本の唱歌や軍歌

のメロディーを借用した『音楽学』の三十七曲の唱歌のうち、「翻

案唱歌」は、「鄂中大觀」「乳燕」「桃」「蟻戰」「學校之鐘」「鳥羊之

孝」「蜜蜂」「小學生」「貓」「鐵道」「運動會（尋常小学唱歌）」「元

旦」「長江」「中國」「湖北」「雪」「日本男兒」「歐美之遊」「崑崙

山」「魯仲連」「遠遊」「歲寒」「勵志」「楚山楚水」「鼓」の計二十五

曲である。

以下、いくつかの例を挙げて、日本唱歌との意味の違いをより詳

しく分析する。

【例一】

鐵道（『音楽学』九十七頁）

（一）披輿圖、考鐵道、中國原不少、

試將那、測定綫、地名一一表、

東清蘆漢、正太蒙古、中部亞洲地、

與遼東、此諸路、已是俄修造、

（二）有淞滬、和津鎮、寧波與晉甯、

津榆牛莊、河南路、滇緬與滬寧、

亞洲權斷・瑞安襄陽・脩武炭礦處、

鐵道綫・凡十二・權利已歸英、

(三) 法國造・北海南寧・雲南與龍州、

山東四百五十里・德人勢力最優、

閩漢宣城潮汕綫・近已屬日本、

北京九江路歸美・粵澳是葡修、

(四) 智矣哉・川漢路・川省爭回修、

粵澳路・從今後・亦當自運籌、

合衆志・積衆資・利權漸擴大、

盡收回・中國路・文明駕歐美、

鐵道唱歌 (『地理教育鐵道唱歌』第一集、一〇三十三頁)

一 凜笛一聲新橋を

はや我凜車は離れたり

愛宕の山に入りのこる

月を旅路の友として

二 右は高輪泉岳寺

四十七士の墓どころ

雪は消えても消えのこる

名は千載の後までも

三 窓より近く品川の

(品川)

臺場も見えて波白く

海のあなたにうすがすむ

山は上總か房州か

四 梅に名をえし大森を

すぐれば早も川崎の

大師河原は程ちかし

急げや電氣の道すぐに

五 六十六 省略

七五調というのは七音・五音の句を順に繰り返す形式のことである。日本の「鐵道唱歌」は歌詞を見れば分かるように「七五調」である。しかし、中国の唱歌「鐵道」は「三・三・五」、「四・四・五」、「七・五」等、歌詞の文字数が一定していない。中国の唱歌「鐵道」の歌詞が日本の「鐵道唱歌」とは異なる文字数で形成されているのは明白である。また、『音楽学』の第十二曲「小学生」は、「煙も見えず雲もなく」という歌い出しの「七五調」の唱歌である「勇敢なる水兵」のメロディーを借用しているが、その歌詞は「小学生・天機茂・好似歳之初」(『音楽学』八十九頁)といった「三・三・五」のリズムで一貫している。ほかの『音楽学』の唱歌を見ても「七五調」の歌詞は極めて少ない。このことは、『音楽学』の編者は日本の唱歌とは異なつたリズム感を持っていたことを示してい

る。あるいは、日本の唱歌のメロデーだけを借用してそのメロデーと合っている七五調の歌詞を中国語の歌詞に入れ替える時に、日本語の歌詞の詩としてのリズム自体を無視したのだろう。それは中国人の「五言絶句」や「七言律詩」、あるいは「宋词」で育てられた感覚で作った中国語の歌詞の文字数と、「和歌」や「俳句」で培われた日本人の言葉のリズムの感覚が違っていたからだと考えられる。

次に、歌詞の意味を比べてみよう。『地理教育鐵道唱歌』第一集の歌詞は六十六番まであり、「凧笛一聲新橋を」から始まり、品川く国府津く沼津く浜松く米原く京都く神戸までの、汽車が走る東海道線の計八十五の駅付近の風景を歌っている。第一集の『東海道』のほかに、『山陽・九州』『奥州線・磐城線』『北陸地方』『関西・参宮・南海各線』の全五集から成り、まさに日本中をめぐる地理教育の歌である。近代文明を代表する鉄道を唱歌として歌うことには、国内交通の完備に対する明治三十年代の日本人の誇りが見て取れる。ある学者は「機関車を歌ったのも、巨視的にみれば、『花鳥風月』(農業、自然)への離別、新たな即物的な現実への開眼を意味した⁽¹³⁵⁾」と批評している。「鉄道唱歌や海洋唱歌などの地理唱歌では地名とその歴史的背景などを歌いこむことで、自然と覚え込むということが行われた⁽¹³⁶⁾」と指摘されるように、そこには唱歌と地理、歴史との統合的な教育意図がある。「これは帝国としての日本空間の拡

張がいかに唱歌によつて内面化されていったのか、という観点から整理する必要があります⁽¹³⁷⁾」と先行研究でも述べられているように、「鐵道唱歌」という唱歌は単に学生に楽しく歌わせるための学校唱歌ではないので、日本の社会や歴史的な文脈の中で捉える必要がある。

中国語の唱歌「鐵道」に変わっても、地理と歴史的背景を唱歌の中に統合させて学生に歌わせることでそれを自然に教え込むという教育意図はそのまま引き継がれている。しかし、二十世紀初頭において、半植民地半封建の中国と近代化が進みロシアに勝利したことで帝国の道を進んでいる日本とは、当然歴史的背景は異なっていた。それゆえに、日本の「鐵道唱歌」と対照的に、中国の「鐵道」という唱歌の歌詞は、列強諸国に鐵道の利権を奪われた中国の悲惨な現実を描写したものになっている。歌詞の一番から三番までは、「東清鐵道」がロシアに、「瑞安」「襄陽」「脩武」など計十二本の鐵道がイギリスに、「北海」「南甯」「雲南」「龍州」の鐵道がフランスに、「山東」省内の大部分の鐵道がドイツに、「宣城」「潮汕」の鐵道が日本に、「北京」「九江」の鐵道がアメリカに、「広州」「澳門」の鐵道はポルトガルに、それぞれ占領されていることが描かれている。四番では、「川漢路」(四川省成都く湖北省武漢)の利権を列強から取り戻したことが賛美されている。最後に、国辱を雪いで列強から奪われた鐵道の利権をすべて取り戻すべきだということを当時

の小学生に教えているのである。

次に、「崑崙山」と「富士山」を取り上げる。

【例二】

崑崙山（『音楽学』一三六～一三七頁）

（一） 亞細亞洲、山脈蜿蜒、發自崑崙山、

南走五巔東泰岱、北至外興安、

關山險阻壯奇觀、細將形勝覽、

千古一秤老爭戰、英雄出其間、

壯士長歌出漠關、定遠唱刀環、

虎頭燕頤威風凜々、勲業炳人寰、

（二） 中國全部、山脈遷池、發自崑崙山、

高屋建瓴占形勝、自古戰場寬、

漢唐將相多雄圖、宣威沙漠遠、

壯哉書生棄繻去、封侯入故關、

玉門關外朔風寒、奮背掛征鞍、

西域定後鬢毛斑、威名石壁刊、

富士山（『中学唱歌』二～三頁）

第一章

直立一千二百丈
ちよくりつせん に ひやくちやう

足もとよりぞ起りける
あし ともよりぞ おこ

夏猶寒き白雪は
なつ なおさむ しらゆき

空の真中にもりけり
そら みなか

仰げや高き富士の山
あふ たか ふじ やま

富士は御国の鎮なり
ふじ みくに しずめ

第二章

富士の麓に湧く雲は
ふじ ふもとに わくも

足柄山にかゝるなり
あしがらやま

富士の裾野に降る雨は
ふじ すその ふあめ

箱根の峰にそぐなり
はこね みね

仰げや高き富士の山

富士は御国の鎮なり

第三章

三保の松原田子の浦
みほ まつばら たご うら

古き名所歌多し
ふる などころ

道行く人のここに來て
みちゆく ひと

富士仰がぬもなかりけり

仰げや高き富士の山

富士は御国の鎮なり

ここで「富士山」が「崑崙山」に変更されているのは興味深い。

富士山は日本人の「信仰の対象と芸術の源泉」⁽³⁸⁾である。この唱歌「富士山」では、各番で「仰げや高き富士の山 富士は御国の鎮なり」というフレーズが反復されている。「富士山」信仰を「国」の信仰へと移行させているのである。古代の富士信仰と近代の国家主義を結びつけることによって、日本民族の精神的シンボルを賛美している。それに対し、「崑崙山」が賛美するのは、中国西部何省にも跨り、中国の神話伝説にしばしば登場する神秘的な崑崙山である。

実際の崑崙山は、中国東北部の興安嶺や中国東部の泰山とは山脈が異なるにもかかわらず、「崑崙山」の歌詞ではそれらの山も含めて中国の山は全て崑崙山の山脈の一部であると書かれている。崑崙山は、中国の伝統的な神話「西王母伝説」と伝統宗教「道教」の修煉地・巡礼地として、また中国民族の発祥地として広く知られており、現在でも中華人民共和国中央政府のホームページで崑崙山を「万山の祖崑崙山」⁽⁴⁰⁾として紹介しているほどに、中国文化の重要な源の一つであるという強固な認識がある。「崑崙山」の歌詞が崑崙山の山脈描写を誇張しているのはそのためだと推測できる。また歌詞の中では「定遠」「宣威」という言葉を用いており、周辺地域の戦乱を治めようとする中華思想支配下の中央王朝の民族意識をありのままに反映している。近代において西洋諸国に侵略される状況下で唱えられた悲願であることも窺える。「漢唐」の時代に中国の版図が「西域」まで広がったという歴史上の栄光と、列強によつ

て新疆及び中国東北部の辺境が清朝中央政府から奪われ半植民地化されつつあるという現実とのジレンマを連想させる。古代のように混乱を治めて中国を救う「英雄」の登場を訴える唱歌だとも言えよう。総じて言えば、「富士山」と「崑崙山」は各々の国の文化的な記号を用いて国民の一体感を強調し、国家主義の旗を掲げているのである。

【例三】

中国『音楽学』一〇九頁

(一) 皇々中国、版圖寬、方里四百萬、

崑崙山脈、東南底海、北至外興安、

黃河金沙、大盤江、交通舟楫便、

芒々大陸、多形勝、物博蓋瀛寰、

(二) 堂々中国、歷史長、經過四千年、

由盤古、至唐虞、盛運啟中天、

萬世師表、宗孔教、泰山小天下、

秦皇漢武、唐宗明祖、威武震三邦、

(三) 浩々中国、人口繁、林總四萬々、

團結御外、富腦力、勤儉成習慣、

周秦諸子、述著多、發明皆利用、

管墨申韓、孫吳穰苴、專技各操券、

(四) 赫々中國、當此時、時乎不再來、

敵國外患、真師保、男兒實快哉、

險阻備嘗、情偽知、精神當振刷、

范蠡霸越、汾陽興唐、事業繼起來、

わが日の本(『小学唱歌集』初編、十一頁)⁽¹⁾

一 わがひのもとの。あさぼらけ。

かすめる日かげ。あふぎみて。

もろこし人も。高麗^こびとも。

春たつけふをば。しりぬべし。

二 雲間にさけぶ。ほととぎす。

かきねににほふ。うつぎばな。

夏来にけりと。あめつちに。

あらそひつぐる。はなとり。

三 きぬたのひびき。身にしてみて。

とこよのかりも。わたるなり。

やまともろこし。おしなべて。

おなじあはれの。あきの風。

四 まどうつあられ。にはのしも。

ふもとのおちば。みねのゆき。

みやこのうちも。やまざとも。

ひとつにさゆる。ふゆのそら。

国境を越えた唱歌が変化するのとは不自然なことではない。『音楽学』に収録されている「中國」という唱歌は日本の唱歌「わが日の本」のメロディーを借用し、モチーフも国家という点では同じようだが、両者の歌詞の意味は完全に異なっている。

「わが日の本」は四番まであり、春夏秋冬の季節ごとの日本の風景を描く。歌詞に季節折々の風物詩として挙げられたのは、春の掠める日陰、夏の霍公鳥と空木花、秋の砧の声、常世の雁と秋の風、冬の窓打つ霰、庭の霜、麓の落葉と峰の雪などである。日本人の自然観が込められた一曲である。これらの風物詩を通じて、美しい日本国のイメージが作られた。学生に季節の変化に対する注意を促し、美感を育てているのである。

「中國」では、「皇々」(堂々として立派である)、「堂々」(堂々たる)、「浩々」(浩々たる)、「赫々」(赫々たる)等の形容動詞が使われ、国土の広い国、資源と人口の多い国、歴史の長い国、名人の多い国といった中国のイメージが作られている。特に、三番の歌詞では、「團結」(団結)、「富腦力」(頭がいい)、「勤儉」(勤勉)、「儉約」等の言葉を用いて、昔から誇りのある国であるというように自画自賛しているのである。

しかし、なぜ「中國」という唱歌を作った湖北師範生は、「わが

日の本」の季節折々の風物詩の代わりに中国各地の美しい風景を歌うのではなく、中国の長い歴史を振り返って英雄伝を語り、中国人を褒めなければならなかったのだろうか。その理由は「中國」という唱歌の最後で「中国が外敵に直面している今こそ、男たちも「安史の乱」を収めた郭汾陽という英雄のように立ち上がり中国を振興する時だろう」と呼びかけていることから読み取れる。つまり、この唱歌には当時の湖北の留学生たちの国を再興しようとする思いが込められているのである。

【例四】

日本男児（『音楽学』一二七頁）

（一） 壯矣哉日本男児 壯矣哉日本男児

區々三島峙東亞 竟控龐大俄羅斯

和平之仇不可容 青年一會便興師

日本多是壯男兒 我輩當學之

（二） 義矣哉日本男児 義矣哉日本男児

同仇同袍復同德 捐身捐命或捐資

少者出征老者送 祝爾從軍酒一厄

日本多是義男兒 我輩當學之

（三） 忠矣哉日本男児 忠矣哉日本男児

戰鼓一聲天地震 誓不制勝不班師

廣瀨軍神決死隊、英靈赫々榮國旗、
日本多是忠男兒、我輩當學之。

（四） 勇矣哉日本男児 勇矣哉日本男児

彈丸亂落如紅雨、曲尾相應不相離、

海水徒涉便登陸、敵人一見驚神奇、

日本多是勇男兒、我輩當學之。

前途萬里（『中学唱歌』十八頁）

第一章

前途萬里の 雲を隔て、

望をよする 男子の門出

千山萬壑 いざ踏破り

やがて本望 達して見せむ

第二章

凝ては貫く 巖の面

鐵より堅き 男子の決心

高嶺の花を 手折らぬほどは

いかでたゆまむ 萬里の旅路

「前途萬里」は日本男児が七難八苦を克服して「高嶺の花」を手に入れるという勇ましい精神を讃えている。また、「前途萬里」「千

山万壑」という漢字の四字熟語の使用や古文風な表現からは、当時の作詞者の漢学の素養を窺うことができる。

それに対して、「取るに足らない三つの島が東亜に立ち、ついに巨大なロシアに戦いを挑んだ」という中国の唱歌「日本男児」の歌詞は、間違いなく「日露戦争」でロシアと戦っている日本を讃美したものである。「日本男児」には「壯」「義」「忠」「勇」といった気質があると歌っている。この歌で四回繰り返し返して歌われる「我らは学ぶべきだ（我輩當學之）」というフレーズは、日本男児こそ我々中国人が学ぶべき対象であると訴えるものである。

以上の例から、湖北省師範生編纂の唱歌は、日本の唱歌の歌詞を中国語歌詞と入れ替えることによって、国運が衰えていた中国を救うことを呼びかけ、延いては民族精神の高揚を狙うものであったことが判明した。加えて言えば、『音楽学』には「崑崙山」や「中國」のように国民国家の形成に役立つ唱歌があつた一方で、「日本男児」のように、学生の日本へのイメージを形作る唱歌もあつたのである。

おわりに

本稿では従来の先行研究では考察の対象とされてこなかった教科書『音楽学』を同時代に位置付けながら分析し、近代中国の「学堂

楽歌（唱歌）」の受容の過程における変容の実態を考察した。

まずは、「唱歌」の定義や歴史を概観し、中国の「学堂楽歌」と日本の「唱歌」は名称こそ異なるが、「教育の為の歌詞付きの楽曲である」という意味で共通していることを明らかにした。また、「弘（宏）文学院」の史料を参照することによって、『音楽学』は湖北師範生が「弘（宏）文学院」で鈴木米次郎に師事し音楽を学んだ成果であると位置づけた。

『音楽学』の下編の四十二曲の唱歌と外国の曲との関係について検証した結果、中国の留学生が作成した『音楽学』では、西洋の歌を基にした唱歌よりも日本人が独自に創作した唱歌を基にした唱歌が圧倒的に多いことが分かった。日本への留学と日本人教師から唱歌を学んだという事実、唱歌と「德育」との関係などをふまえて考えれば、日本からの影響が強かったのだと結論づけられる。

日本の先行研究では、明治期の唱歌と西洋の曲との関係（「日本」と「西洋」の二元的な構図）を論じることには重点が置かれているが、中国の先行研究では中国の「学堂楽歌」（唱歌）と日本や西洋の曲との関係（「中国」と「日本」／「西洋」という二元的な構図）を論じることには重点が置かれている。視野を広げ、「西洋から日本、更に中国へ」というように、中国の「学堂楽歌」（唱歌）をめぐる連鎖的な受容史を考察することが本稿での課題であつた。表1で「西洋↓日本↓中国」といった受容の経路を明確にしたことは、その意味

で有意義な試みであったと思われる。

『音楽学』の唱歌の歌詞と元歌の歌詞の内容について考察した結果、受容過程においてメロディーよりも歌詞の変更が著しいことが分かった。『音楽学』では、元歌の日本の唱歌のメロディーを借用して歌詞だけを翻訳した「翻訳唱歌」よりも、原曲の歌詞を完全に改変した「翻案唱歌」のほうが多い。「鐵道」唱歌のようにテーマが同じであるものもあるが、それぞれの国の置かれた状況が異なっているため、歌詞から学生に教えるものも違ってきたのである。また、「崑崙山」、「中國」、「日本男兒」などのように、唱歌教育を通じて中国人を励まし、近代的な国民形成に寄与しようとしたことが読み取れた。

最後に本論では論じきれなかった問題について述べる。表1の右側の欄には、日本の唱歌が受容した「西洋」の曲というようにまとめて分類したが、「西洋」と一括りにするのではなく、「アメリカ」「イギリス」「ドイツ」など具体的な国まで特定して比較し、曲の伝播・受容をより深く分析する必要がある。

また、日本の唱歌集の影響を受けたのは決して本論で取り扱った『音楽学』だけではない。他の清末の唱歌集に対しても本論で行ったのと同様の検証作業を行い、日本の唱歌のメロディーを借用した曲があったことを検証していきたい。それについて現時点の調査で判明したことを表2（巻末）にまとめる。

表2の右端の欄は、日本の唱歌のメロディーを借用した曲数と、その唱歌集に収録されている唱歌の総数の比を唱歌集別に示したものである。現時点で判明していないものは「未詳」と記した。これらの唱歌集に収録されている唱歌と日本の唱歌の関係を更に検証する必要がある。

注

- (1) 「新式学堂」とは清末の中国で設立された西学を教える学校を指す。
- (2) 中国音楽家協会・中国音楽研究所編『中国近现代音乐史教学参考资料第一編（1840-1919）』、発行所なし（油印本）、一九五九年。
- (3) 中国大陸の研究者だけではなく、台湾の研究者も「学堂楽歌」という用語を使用している。例えば、劉靖之『中国新音楽史論』、耀文、一九九八年、三十七頁。
- (4) 張靜蔚「論学堂楽歌」、中国芸術研究院研究生部編『中国芸術研究院首届研究生硕士学位论文論文集・音楽卷』、文化芸術出版社、一九八七年、一一六～一一七頁。原文「『学堂楽歌具体所指的，是清末民初新式学校開設的音樂課和課中所教唱的歌曲。它引進外來曲調，填以反映新思想的歌詞，構成一種却別与我国伝統音樂的新体裁，成為我国近代音樂發展的一個開端。』なお、本稿における中国語文献からの引用の日本語訳はすべて筆者によるものである。
- (5) 錢仁康『学堂楽歌考源』、上海音楽出版社、二〇〇一年、二～三頁。
- (6) 柴田南雄・遠山一行総監修『ニューグローブ世界音楽大事典』第八巻、講談社、一九九四年、五〇〇頁。

- (7) 金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌 上（明治篇）』、講談社、一九七七年、三頁。
- (8) 「唱歌（しょうか）定義と概観、教科としての唱歌、歴史」、日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』、音楽之友社、二〇〇四年、四四二～四五〇頁。
- (9) 同前、四四三頁。
- (10) 同前。
- (11) 「唱歌」、堀内久美雄『新訂標準音楽辞典 アーテ』、音楽之友社、二〇〇八年、第二版、八八三頁。
- (12) 江崎公子「附章——周辺文化に見る『唱歌』」、江崎公子・澤崎眞彦編『唱歌大事典』、東京堂、二〇一八年、再版、七二三頁。文中の「中略」は筆者による。
- (13) 件名・学制附改正、簿冊標題…太政類典・第二編・明治四年～明治十年・第二百四十三卷・学制一・教員制度及属員学制一、国立公文書館デジタルアーカイブ公開資料、請求番号…太00466100、九～十頁。
- (14) 伊沢修二編著、山住正己校注『音楽事始——音楽取調成績申報書』、平凡社、一九八八年、初版第八刷、三頁。
- (15) 安田寛「明治音楽事始め」、安田寛ほか編『原典による近代唱歌集成——誕生・変遷・伝播（解説・論文・索引）』、ビクターエンタテインメント、二〇〇七年、第三刷、一六四頁。
- (16) 「唱歌」、下中邦彦編『音楽大事典3 シーテ』、平凡社、一九八二年、十二～十七頁。
- (17) 澤崎眞彦「序章——唱歌集と教室の子どもたち」、前掲江崎公子・澤崎眞彦編『唱歌大事典』、十三～十七頁。
- (18) 汪朴「清末民初楽歌課之興起確立經過」、『中国音楽学』一九九九年第一期、五十七～七十三頁。
- (19) 孫継南「我国近代早期「楽歌」的重要発見…山東登州『文会館志』「文会館唱歌選抄」的発見經過」、『音楽研究』二〇〇六年六月第二期、七十三～七十七頁。及び、劉再生「我国近代早期「学堂」和「楽歌」…登州『文会館志』和「文会館唱歌選抄」之史料初探」、『音楽研究』二〇〇六年九月第三期、三十九～四十九頁、九十七頁。
- (20) 沈治、許常惠編『学堂楽歌之父…沈心工之生平與作品』、中華民国作曲家協会、一九八九年、二十七頁、八十四頁。
- (21) 李岩『曾澤霖志恣考』、光明日報出版社、二〇二一年、一五〇～一六〇頁には、曾澤霖について詳しく書かれている。更に、沈雲龍主編『近代中国史料叢刊続輯第五十輯…佚名編「清末各省官・自費留日学生姓名表」』（文海出版社、一九七八年）の「各省官費・自費卒業学生姓名表（自光緒三十四年九月起至宣統元年七月止）」第二頁には、曾澤霖（志恣）は一九〇一年に日本に渡り、一九〇三年に早稲田大学に留学したと記されている。
- (22) 天津市政協文史資料研究委員会・天津市宗教志編纂委員会編『李叔同…弘一法師』、天津古籍出版社、一九九八年、十～十五頁。
- (23) 江蘇同郷会幹事編『江蘇』第七期、江蘇同郷会出版部、一九〇三年、五十九～七十四頁。
- (24) 璩鑫圭・唐良炎編『中国近代教育史資料匯編…学制演變』、上海教育出版社、二〇〇七年、五八七～五八八頁、五九二頁、五九六～六〇〇頁。
- (25) 多賀秋五郎『近代中国教育史資料清末編』、日本学術振興会、一九七二年、六〇五～六〇八頁。
- (26) 前掲璩鑫圭・唐良炎編『中国近代教育史資料匯編…学制演變』、七〇六～七〇七頁。
- (27) 同前、六八二～六八三頁、六九一～六九五頁。
- (28) 伍雅誼主編『中国近现代学校音楽教育：1840-1949』、上海教育出版社、二〇一〇年、一一一～一一六頁。
- (29) 塚原康子『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』、多賀出版、一九九三

年。

- (30) 榎本泰子『楽人の都・上海——近代中国における西洋音楽の受容』、研文出版、一九九八年。
- (31) 細川周平『近代日本音楽百年第一巻——洋楽の衝撃』、岩波書店、二〇二〇年、一八三〜二六三頁。
- (32) 堀内敬三『音楽五十年史』、鱗書房、一九四二年。
- (33) 遠藤宏『明治音楽史考』、有朋堂、一九四八年。
- (34) 海後宗臣編纂『日本教科書大系近代篇第二十五巻——唱歌』、講談社、一九六五年。
- (35) 井上武士編『日本唱歌全集』、音楽之友社、一九七二年。
- (36) 前掲金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌 上(明治篇)』。金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌 中(大正・昭和篇)』、講談社、一九七九年。金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌 下(学生歌・軍歌・宗教歌篇)』、講談社、一九八二年。
- (37) 大和淳二監修・解説『文部省唱歌集成——その変遷を追って』、日本コロムビア、二〇〇〇年。
- (38) 安田寛・赤井励・関庚燦編纂『原典による近代唱歌集成』、ビクターエンタテインメント、二〇〇〇年。
- (39) 齋藤基彦編『明治の唱歌——復刻』(全四巻)、文憲堂、二〇一五年。
- (40) 前掲江崎公子・澤崎眞彦編『唱歌大事典』。
- (41) 山住正己『唱歌教育成立過程の研究』、東京大学出版会、一九六七年。
- (42) 田甫圭三『唱歌教育の日本的展開』、学文社、一九八一年。
- (43) 中山エイ子『明治唱歌の誕生』、勉誠出版、二〇一〇年。
- (44) 松村直行『童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ——明治・大正・昭和初中期』、和泉書院、二〇一一年。
- (45) 嶋田由美『唱歌教育の展開に関する実証的研究』、学文社、二〇一八年。
- (46) 岩井正浩『子ども歌の文化史——二〇世紀前半期の日本』、第一書房、一九九八年。
- (47) 奥中康人『和洋折衷音楽史』、春秋社、二〇一四年。
- (48) 東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史——東京音楽学校篇第一巻』、音楽之友社、一九八七年。
- (49) 山東功『唱歌と国語——明治近代化の装置』、講談社、二〇〇八年。
- (50) 奥中康人『国家と音楽——伊澤修二がめざした日本近代』、春秋社、二〇〇八年。
- (51) 佐藤慶治『翻訳唱歌と国民形成——明治時代の小学校音楽教科書の研究』、九州大学出版会、二〇一九年。
- (52) 安田寛『唱歌と十字架——明治音楽事始め』、音楽之友社、一九九三年。安田寛『日韓唱歌の源流——すると彼らは新しい歌をうたった』、音楽之友社、一九九九年。安田寛『唱歌』という奇跡十二の物語——讚美歌と近代化の間で、文藝春秋、二〇〇三年。安田寛『日本の唱歌と太平洋の讚美歌——唱歌誕生はなぜ奇跡だったのか』、東山書房、二〇〇八年。
- (53) 櫻井雅人『唱歌集の中の外国曲——『小学校唱歌集』を中心として(1)、『言語文化』四十一巻、二〇〇四年、三〜十七頁。櫻井雅人『唱歌集の中の外国曲——『小学校唱歌集』を中心として(2)、『言語文化』四十二巻、二〇〇五年、三〜十三頁。櫻井雅人『旅泊』その他——外国曲からの唱歌四曲、『一橋論叢』一三四巻三号、二〇〇五年、三一九〜三三三頁。櫻井雅人ほか『仰げば尊し——幻の原曲発見と『小学校唱歌集』全軌跡』、東京堂出版、二〇一五年。
- (54) 松本正『東京音楽学校編『中学唱歌』に関する研究』、『大分大学教育学部研究紀要』三十八巻一号、二〇一六年、七十五〜九十頁。
- (55) 伊藤公雄ほか『唱歌の社会史』、メディアアイランド、二〇一八年。
- (56) 武石みどり監修、東京音楽大学創立百周年記念誌刊行委員会編集『音楽教育の礎——鈴木米次郎と東京音楽学校』、春秋社、二〇〇七年。
- (57) 丸山忠璋『言文一致唱歌の創始者田村虎蔵の生涯』、音楽之友社、

- 一九九八年。
- (58) 前掲中国音楽家協会・中国音楽研究所編『中国近現代音楽史教学参考資料第一編 (1840-1919)』。
- (59) 張靜蔚編『中国近代音楽史料彙編：1840-1919』、人民音楽出版社、一九九八年。張靜蔚『搜索歴史：中国近現代音楽文論選編』、上海音楽出版社、二〇〇四年。
- (60) 俞玉滋・張援編『中国近現代学校音楽教育文選 1840-1919』、上海教育出版社、二〇〇〇年。俞玉滋・張援編『中国近現代学校音楽教育文選 1840-1919』、上海教育出版社、二〇一一年、二版。
- (61) 孫繼南『中国近現代音楽教育史記年 1840-1989』、山東友誼出版社、二〇〇〇年。孫繼南『中国近現代音楽教育史記年 1840-1989』、山東教育出版社、二〇〇四年、二版。孫繼南『中国近現代音楽教育史記年 1840-1989』、上海音楽学院出版社、二〇一二年、三版。
- (62) 陳建華・陳潔『民国時期音楽史年譜』、上海音楽出版社、二〇〇五年。
- (63) 錢仁平主編『民国時期音楽文献總目』、廣西師範大學出版社、二〇一三年。錢仁平編『民国時期音楽文献匯編』、國家圖書館出版社、二〇一五年。
- (64) 章威・張援編『中国近現代芸術教育法規彙編』、教育科学出版社、一九九七年。
- (65) 汪毓和『中国近現代音楽史：1840-1949』、人民音楽出版社、一九八四年。汪毓和『中国近現代音楽史：1840-1949 (修訂版)』、人民音楽出版社、一九九四年、再版。汪毓和『中国近現代音楽史参考資料』(上)(下)、世界図書出版公司西安公司、二〇〇〇年。汪毓和『中国近現代音楽史 (第2次修訂版)』、人民音楽出版社、華樂出版社、二〇〇二年。汪毓和『中国近現代音楽史 (第3次修訂版)』、人民音楽出版社、二〇〇九年。汪毓和・胡天虹『中国近現代音楽史：1901-1949』、人民音楽出版社、二〇〇六年。汪毓和『中国近現代音楽史』、上海音楽出版社、二〇一二年。
- (66) 陶亜兵『中西音楽文化交流史稿』、中国大百科全書出版社、一九九四年。
- 陶亜兵『明清間の中西音楽交流』、東方出版社、二〇〇二年。
- (67) 馮文慈『中外音楽交流史』、湖南教育出版社、一九九八年、二七一～二九二頁。
- (68) 馬達『20世紀中国学校音楽教育』、上海教育出版社、二〇〇二年、一～三十五頁。
- (69) 陳聆群『中国近現代音楽史研究在20世紀』、上海音楽学院出版社、二〇〇四年、一〇四～一二八頁。
- (70) 明言『20世紀中国音楽批評導論』、人民音楽出版社、二〇〇二年。
- (71) 馮長春『中国近代音楽思潮研究』、人民音楽出版社、二〇〇七年、三十～三十四頁。
- (72) 前掲伍雍誼主編『中国近現代学校音楽教育：1840-1949』。
- (73) 中国芸術研究院音楽研究所編『中国近現代音楽家伝』、春風文艺出版社、一九九四年。
- (74) 劉麟玉『台湾の植民地時期の唱歌教育——台湾總督府出版の唱歌集をめぐって』、松下鈞編『異文化交流と近代化』、京都国際セミナー1996組織委員会発行、大空社発売、一九九八年、二五三～二五九頁。劉麟玉『植民地下の台湾における学校唱歌教育の成立と展開』、雄山閣、二〇〇五年。
- (75) 蔣英『貴州師範学院人類学文庫：清末民初貴州学堂唱歌考』、中国社会科学出版社、二〇一五年。
- (76) 陳淨野『李叔同学堂唱歌研究』、中華書局、二〇〇七年。
- (77) 谷玉梅『学堂唱歌之父・沈心工研究』、社会科学文献出版社、二〇一八年。
- (78) 李岩『曾澤霖志考』、光明日報出版社、二〇一九年。
- (79) 羅伝開『中国日本近現代音楽上の平行現象 (序論：歴時性的変容)』、『音楽研究』一九八七年第三期、二六～三十五頁。
- (80) 張前『異文化交流と中国音楽の近代化——学堂唱歌を中心に』、前掲松下鈞編『異文化交流と近代化』、二四八～二五二頁。及び張前『中日音楽交流史』、人民音楽出版社、一九九九年。

- (81) 田島みどり「近代中国の初期学校音楽教育の中で日本が果たした役割」、前掲松下鈞編『異文化交流と近代化』、一九八〇二〇一頁。
- (82) 前掲錢仁康『学堂楽歌考源』。
- (83) 高婷『近代中国における音楽教育思想の成立——留日知識人と日本の唱歌』、慶應義塾大学出版会、二〇一〇年、二〇七〜三〇八頁。
- (84) 日本鈴木米次郎・中島六郎講授、湖北師範生陳邦鎮・傅廷春共編『音楽学』（師範教科叢編第十四種、湖北学務処、一九〇五年）。
- (85) 張之洞撰・闕名浅訳『学堂歌浅訳』、出版社不明、一九〇五年（京都大学人文科学研究科図書室所蔵）。『小学新唱歌』、上海新学会社、一九〇五年、増訂再版（中国国家図書館所蔵）。曾志恣編『教育唱歌集』、東京並活版所印刷、上海開明書店販売、発行者上海曾志恣、一九〇五年、増訂四版（中国国家図書館所蔵）。辛漢編『中学唱歌集』、上海普及書局、一九〇六年（中国国家図書館所蔵）。江蘇師範生編『音楽体操』、江蘇寧属・蘇属学務処、一九〇六年（中国国家図書館所蔵）。陌南学堂編集部『新選学校唱歌三百首』、古今図書局営業部、一九〇六年（中国国家図書館所蔵）。李叔同編『国学唱歌集』、中新書局国学会、一九〇六年、再版（南京図書館所蔵）。金一編『新中国唱歌』三集、上海宏文館、一九〇六年（中国国家図書館所蔵）。徐紹曾・孫揆合編、揚墨林校閱『表情体操教科書：又名唱歌遊戲』、上海科学書局、一九〇七年（中国国家図書館所蔵）。亜雅音楽会編『蒙養院小学堂唱歌集』、大日本図書、一九〇九年（国立国会図書館所蔵）。
- (86) 鈴木正弘「清末留日学生の伝えた日本の歴史教科書編纂法と歴史教授法」、『アジア教育史研究』二十一卷、アジア教育史学会、二〇一二年、一〜十八頁。
- (87) 同前、一〜十八頁。
- (88) 王鼎「清末における湖北省日本留学生の総合研究」、新潟大学大学院現代社会文化研究科博士学位論文、二〇二〇年、一六二頁。
- (89) 田原禎次郎編『清末民国初中官紳人名録』、中国研究会、一九一八年、五四九頁。
- (90) 総務庁文書科編『農商部職員録農林司』、一九二三年、五十七頁。
- (91) 前掲王鼎博士学位論文、一六五頁。
- (92) 前掲総務庁文書科編『農商部職員録農林司』、五十七頁。
- (93) 前掲『音楽学』、一頁。
- (94) 東京音楽学校編『東京音楽学校創立五十年記念』、東京音楽学校、一九二九年、二十九頁、三十六頁。
- (95) 武石みどり監修、東京音楽大学創立百周年記念誌刊行委員会編集『音楽教育の礎——鈴木米次郎と東洋音楽学校』、春秋社、二〇〇七年、資料編Ⅲ六十七頁。
- (96) 高婷「鈴木米次郎の清国留日学生に対する音楽教育との関わり」、『社会学研究科紀要』第六一号、慶應義塾大学、二〇〇五年、十五〜二十九頁。
- (97) 弘文学院編「弘文学院職員名簿（明治三十八年十二月現在）」、講道館所蔵「弘文学院（一）」、資料番号なし。
- (98) 弘文学院編「職員異動一覧」、講道館所蔵「弘文学院（一）」、資料番号なし。
- (99) 「翰文民国図書文庫」（中華民国時期の本のデジタルアーカイブ URL: <http://hwshu.com/>）。
- (100) 潘世聖「弘文学院留学期の魯迅における日本受容——新発見の『宏文学院講義録』を手掛かりに」、東大中国学会編『中国——社会と文化』三十四号、二〇一九年、二一四〜二三五頁。
- (101) 蔭山雅博「宏文学院における中国人留学生教育——清末期留日教育の一端」、『日本の教育史学』二十三卷、一九八〇年、七十四頁。
- (102) 朱有職主編『中国近代学制史料』（第一輯下冊）、華東師範大学出版社、一九八六年、九八八頁。原文：「光緒二十八年（一九〇二年）四月湖广總督張之洞于武昌創辦師範学堂一所。東路小学堂附属其旁邊，歸師範学生教課，以資試驗。」

- (103) 「督憲張撫憲端招考湖北師範學生示」、「湖北學報」第一卷第二期、一九〇三年、二〇三頁。原文…「此次所教師範學生預備將來為本省各府州縣小學校教習之用」。
- (104) 秀英舎編『株式會社秀英舎創業五十年誌』、秀英舎、一九二七年、一頁。
- (105) 「東京都牛込區全圖」(一九一〇年)、東京都新宿區教育委員會編『地図で見る新宿區の移り変わり——牛込編』、東京都新宿區教育委員會、一九八二年、三三〇頁。
- (106) 嘉納治五郎「宏文學院經營譚」、「成功」九卷一號、春期臨時增刊、一九〇六年、五〇九頁。
- (107) 弘文學院編『弘文學院章程要覽』四〇八頁、講道館所藏「宏文學院(一)」資料番号なし。
- (108) 講道館監修『嘉納治五郎大系』第十一卷、本の友社、一九九四年、一七五頁。
- (109) 弘文學院編『宏文學院一覽』、講道館所藏「宏文學院(一)」。
- (110) 弘文學院編『師範學校規則』、講道館所藏「宏文學院(一)」。
- (111) 『音楽学』一頁。原文…「是編係鈴木中島兩先生所講授、專備師範教科之用、復採鈴木先生及田村虎藏、石原重雄、白井規矩郎、近森出來治、諸君音樂教科書編纂而成」。
- (112) エフ・エー・ゴール・オシレー著、鈴木米次郎訳補『新編音樂理論』、嵩山房、一八九二年。
- (113) 鈴木米次郎編『音樂理論百ヶ條』、有正館、一八八九年。
- (114) 鈴木米次郎『樂典大意(音樂全書第1編)』、自省堂、一九〇四年。
- (115) 田村虎藏『近世樂典教科書』、開成館、一九〇一年。
- (116) 石原重雄『新撰樂典大要』、富山房、一八九六年。
- (117) 石原重雄『新撰小學唱歌教授法』、共益商社、一九九〇年。
- (118) コルウェン著、白井規矩郎訳『唱歌教授法』、徴古堂、一八八八年。
- (119) 近森出來治『樂典摘要』、前川書店、一九〇三年。
- (120) 張前「中國學校唱歌をめぐって」、前掲安田寛ほか編『原典による近代唱歌集成——誕生・変遷・伝播(解説・論文・索引)』、二四一頁。
- (121) 同前。
- (122) 同前。
- (123) 前掲佐藤慶治『翻訳唱歌と国民形成——明治時代の小学校音楽教科書の研究』では、「仰げば尊し」や「蛍の光」など西洋の曲を借用して新たに日本語の歌詞を入れ替えた唱歌のことを「翻訳唱歌」と呼んでいる。中国の『音楽学』には日本の唱歌を翻訳した「翻訳唱歌」もあれば、全く異なる歌詞に入れ替えた「翻案唱歌」もある。したがって、本論では、外国の歌のメロディーを借用して原曲の歌詞を直訳・意訳する手法で作られた唱歌を「翻訳唱歌」とし、外国の歌のメロディーを借用したが原曲の歌詞を無視して全く新しい歌詞に入れ替える手法で作られた唱歌を「翻案唱歌」とする。また、「翻訳・翻案唱歌」という用語は石原慎司の「唱歌の文化的位置付けに関する一考察」(『音楽表現学』十七卷、二〇一九年、十三三三二頁)という論文でも使われている。「翻訳唱歌」や「翻案唱歌」といった用語はあまり馴染みのない日本語であるが、明治期の日本の唱歌と清末民国期の中国の唱歌を研究するに当たっては、そこに外国の要素がどれほど入っているのかを明確にするために、このように区別する必要がある。
- (124) 松本正「東京音楽学校編『中学唱歌』に関する研究」、「大分大学教育学部研究紀要」三十八卷一號、二〇一六年、七十五〜九十頁。
- (125) 遠藤宏『明治音楽史考』、有朋堂、一九四八年、二二三頁。
- (126) 齋藤基彦編『復刻——明治の唱歌Ⅲ』、文憲堂、二〇一五年、七十六〜七十七頁、一一二〜一一四頁、一二〇〜一二二頁、一二六頁、一二九頁。
- (127) 前掲伊沢修二編著、山住正己校注『洋楽事始——音楽取調成績申報書』、一一三頁。
- (128) 滋賀県師範学校附属小学校校編『滋賀県師範学校附属小学校唱歌科教授細目』、滋賀県教育會、一九〇一年。

- (129) 阿部洋『中国近代学校史研究——清末における近代学校制度の成立過程』、福村出版、一九九三年、二四五頁。
- (130) 「教育：湖南蒙養院教課說略」、『東方雜誌』第九期、一九〇五年、二三九頁。原文：「樂歌以音響節奏發育精神，以歌詞令其舞蹈肖像運動筋脈，以歌意發其一唱三歎之感情。蓋關係於國民忠愛思想者，如影隨形，此化育之宗也。安可忽之。」
- (131) 李宝巽『「教育唱歌」序（一九〇五年）』、前掲張靜蔚編『中国近代音楽史料匯編：1840-1919』、一四六頁。原文：「蓋唱歌者，所以涵養其德性，喚起其精神，童而习之，一种笃实之念，忠爱之情，有陶淑渐摩于不觉者也。」
- (132) 王敏『日本と中国——相互誤解の構造』、中央公論新社、二〇〇八年、iii頁。
- (133) 江蘇師範生編『音楽体操（附參觀筆記）』、江蘇寧属・蘇属学務処、一九〇六年、參觀筆記十六〜十八頁。原文：「步伐整齊精神活潑」。
- (134) 梁啓超『中国之武士道』、上海廣智書局、一九〇四年。
- (135) 東京大学教育学部歴史学部会編『歴史学の思考法』、岩波書店、二〇二〇年、六十八頁。
- (136) 前掲伊藤公雄ほか『唱歌の社会史』、八十七頁。
- (137) 同前。
- (138) “Fujisan, sacred place and source of artistic inspiration,” UNESCO World Heritage Centre. <https://whc.unesco.org/en/list/1418/>（最終閲覧：二〇二三年一月三日）
- (139) 任新農「文明体系重構視野下的崑崙神話研究意義及路徑」、『石河子大学学报（哲学社会科学版）』第三十一卷第三期、二〇〇七年、九十九〜九十五頁。鄂崇榮・張前「中華民族共同体視域下崑崙文化的傳承與流變」、『青海民族大学学报』二〇二二年第一期、六〜十一頁。王伟章「漫談崑崙文化」、『青海民族研究（社会科学版）』第十二卷第二期、二〇〇一年、三十七〜三十九頁。
- (140) 「『万山之祖』 昆仑山」新華社、二〇〇六年六月二十三日、中華人民共和國中央人民政府 http://www.gov.cn/jscw/2006-06/23/content_317798.htm（最終閲覧：二〇二三年十月二十五日）。
- (141) 原本の日本語を判読するにあたって、前掲齋藤基彦編『復刻——明治の唱歌Ⅲ』（二二頁）を参照した。

謝辞

本研究は、JST及び名古屋大学による名古屋大学融合フロンティアフェローシップの支援を受けたものです。この場を借りて御礼申し上げます。

表1 『音楽学』の唱歌の受容関係表

	中国（清国） ←	日本	⇄ ----- ⇄	西洋
	1905年 湖北師範生編 『音楽学』の唱歌（内容紹介）	日本明治期（1905年まで）の 唱歌（内容紹介）		西洋の歌曲 ^{※1}
幼稚園唱歌	(1) 春（春の風景）	「春山」『小学唱歌集』初編 第2曲（日本の自然風景）		[Mason 1 & 2] の第8曲「Nature's fair and bright, Lovely to the sight.」
	(2) 學校團體（友情）			
	(3) 鄂中大觀（湖北省の名勝古跡）	「春は花見」と「鶯」『小学唱歌集』初編 第7曲と第8曲（日本の自然風景）		[Mason 1 & 2] の第24曲「Trust in God, trust in God, Who all blessings pours abroad.」と第27曲「Let us sing a merry lay, Sing we ever, while we may.」
	(4) 乳燕（飛行を学ぶ乳燕を小学生に喩える）	「霞か雲か」『小学唱歌集』第二編 第2曲（桜の満開）		1835年 ドイツ民謡「Alle Vögel sind schon da」
	(5) 雞（時間を惜しむ）	大橋銅造作詞「鶏」『教科適用：幼年唱歌』四編下巻 第2曲（鶏の鳴き声、学校の支度が遅くならないように）		西洋曲だが、曲名は不明。
	(6) 桃（礼譲）	「指遊び第一」『日本遊戯唱歌』第三編 第2曲（手毬遊び等）		
	(7) 蟻戰（人種競争）	「心は猛く」『幼稚園唱歌集』第1曲（勇ましい精神）		アメリカ「Try again」
	(8) 學校之鐘（学校生活）	「蝶々」『幼稚園唱歌集』第2曲（蝶々が「桜の花の栄ゆる御代に止まれや遊べ」）		アメリカ「Boat song / Lightly Row」
	(9) 烏羊之孝（親孝行）	「子供子供」『幼稚園唱歌集』第8曲（勤勉に励む）		
	(10) 蜜蜂（勤労）	渡邊盛衛作詞・栗本清夫作曲「運動会」『中学唱歌集』上巻 第2曲（学校の運動会）		
尋常小学唱歌	(11) 龍旗（国旗）			
	(12) 小學生（国家の未来を担う小学生）	佐佐木信綱作詞・奥好義作曲「勇敢なる水兵」 ^{※2} 『大捷軍歌』第三編 第3曲（「日清戦争」で戦死した水兵の軍国美談）		
	(13) 猫（猫の瞳が一日中変化する原理）	「皇御国」『小学唱歌集』第二編 第42曲（武士も男子も奉公すべし）		
	(14) 野操（軍事ごっこ）			
	(15) 川流（小さな流れが大河になり海に注ぐ）	「小さな流れ」『日本遊戯唱歌』第四編 第3曲（小さな流れが大河になり海に注ぐ）		
	(16) 鐵道（中国の鉄道の利権を外国から回収しよう）	大和田建樹作詞・多梅稚作曲の「鉄道唱歌」『地理教育：鉄道唱歌』第一集（明治期の鉄道沿線の賛歌）		
	(17) 運動會（学校の運動会）	佐佐木信綱作詞・納所弁次郎作曲「凱旋」『日本軍歌』第7曲（国と天皇のために戦い、勝利して帰ってくる）		
	(18) 郭汾陽（「安史の乱」を治めた古代軍事家）			
	(19) 元旦（中国の「春節」という伝統風俗）	「紀元節」『祝日大祭日唱歌』第5曲／『中等唱歌集』第2曲（神武天皇の即位日の祝いのための歌）		
	(20) 長江（長江流域の風景）	「散歩唱歌」『春夏秋冬散歩唱歌』（春夏秋冬の自然風景）		

(表1つづき)

高等 小学 唱歌	(21) 中国（中国の歴史と現状）	「わが日の本」『小学唱歌集』初編 第16曲（春夏秋冬の自然風景）	讃美歌「Happy Land」
	(22) 湖北（湖北の名勝と歴史）	大和田建樹作詞・小山作之助作曲「日本海軍」『新撰国民唱歌』第五集 第2曲／『国民唱歌日本海軍』（日本の軍艦を包括的に歌う）	
	(23) 四時樂（四季の自然風景）		アメリカ「Little Brother」※3
	(24) 螢※4（「螢雪の功」読書、勉学に励む）	「螢」『小学唱歌集』初編 第20曲（卒業生への送別歌、日本の「領土」の範囲を言及）	スコットランド民謡「Auld lang syne」
	(25) 暑假（夏休みに衛生に注意すること）	「夏やすみ」『中学唱歌』第14曲（夏休みに身体を鍛える）	
	(26) 秋（秋の風景）	「来れ秋」『中学唱歌』第15曲（秋の風景）	
	(27) 太平洋（近代化の太平洋）	「太平洋」『中学唱歌』第13曲（太平洋に日本がある）	
	(28) 雪（自然風物）	林廣守作曲「君が代」※5『祝日大祭日唱歌』第1曲／『中等唱歌集』第1曲（天皇統治下の日本が永遠に存続していくこと）	
	(29) 日本男児（壮義忠勇の日本男児）	「前途萬里」『中学唱歌』第11曲（万難を排して成功にたどり着く）	
	(30) 歐美之遊（英、仏、独、米の首都の近代化を見る）	「占守島」『中学唱歌』第12曲（千島列島の最北端「占守島」を日本男児が守ろう）	
中学 唱歌	(31) 雪中行軍（雪に耐えて行軍する勇ましい軍人）	「雪中行軍」『中学唱歌』第1曲（雪に耐えて行軍する勇ましい軍人）	
	(32) 崑崙山（戦功を立てる）	「富士山」『中学唱歌』第2曲（富士山は日本の誇り）	
	(33) 運動會（学生の競技の場）	「運動會」『中学唱歌』第3曲（学生の競技の場）	
	(34) 明日日曜※6（休息して精神を一新できる日曜日）	「明日は日曜」『中学唱歌』第4曲（楽しく遊びの日曜日）	
	(35) 朝起之鐘（学校の鐘が鳴ると授業が始まる）	「朝起の鐘」『中学唱歌』第5曲（早起きの習慣）	
	(36) 驥（中国の歴史の有名な軍馬）	「駒の蹄」『中学唱歌』第6曲（日本男児が馬に乗って報国）	
	(37) 魯仲連（「戦国時代」斉国の品格高い貴族魯仲連）	「牛おふ童」『中学唱歌』第7曲（牛追いの童）	
	(38) 遠遊（日本と欧米諸国の近代都市を見て回る）	「旅路の愉快」『中学唱歌』第8曲（旅路も船路も楽しい）	
	(39) 歳寒（寒中依然青い松柏）	「雪雀」『中学唱歌』第9曲（空に飛ぶ雲雀）	
	(40) 勵志（劉邦、孔明、ビスマルク、コロンブス等の偉人に学べ）	「我等は中学一年生」『中学唱歌』第10曲（学びの困難を乗り越える）	
	(41) 楚山楚水（湖北の歴史と現状）	「寄宿舎の古釣瓶」※7『中学唱歌』第17曲（試験準備中の学生の頭を冷やしたり背中汗を洗い流したりするための古い桶）	
	(42) 鼓（戦争時の攻め太鼓）	「四季の朝」『中学唱歌』第16曲（四季の朝）	

(表1つづき)

- ※1 日本の唱歌のメロディーがどの西洋の歌曲から借用されたのかについては、筆者が斎藤基彦編『復刻——明治の唱歌Ⅲ』、文憲堂、2015年、76～77頁、112～114頁、120～121頁、126頁、129頁を参照した。
- ※2 日本の唱歌「勇敢なる水兵」のメロディーを借用して初めて作られた中国語の唱歌は、銭仁康『学堂楽歌考源』(上海音楽出版社、2001年、82～85頁)に述べられている1907年の「従軍新樂府」ではなく、この「小學生」である。
- ※3 「四時樂」は、大和田建樹・奥好義共編『明治唱歌』第二集(22頁)の「命の雨」や山田源一郎編『女学唱歌』(6～7頁)の「雪」といった日本語の唱歌とは曲調が違うため、それらの日本の唱歌を参照したのではなく、鈴木米次郎編『中学唱歌集』(下巻)に収録されている英語唱歌「Little Brother」を参照したものと判断できる。
- ※4 「蛍の光」のメロディーを借用した中国語唱歌は他にも数多くある。それについては、大日方純夫『唱歌「蛍の光」と帝国日本』(吉川弘文館、2022年)第3章を参照されたい。
- ※5 銭仁康『学堂楽歌考源』(101～102頁)では、「君が代」の旋律を借用した「雪」が辛亥革命以降編纂した唱歌集の中に出てきたと言及されているが、既に1905年の『音楽学』に出ていることが分かった。
- ※6 「明日日曜」は日本語の「日曜日」をそのまま残しているが、中国語で「日曜」といえば、休日ではなく「太陽」を意味する。このことから『音楽学』の編纂者湖北師範生がいかに日本文化に影響を受けていたかがわかる。
- ※7 銭仁康『学堂楽歌考源』(72頁)では、辛漢編『唱歌教科書』(上海普及書店、1906年)に収録された「中国男児」が日本の唱歌「寄宿舎の古釣瓶」のメロディーに初めて中国語の歌詞を当てはめた歌だと指摘されているが、1905年に出版された湖北師範生編集の『音楽学』に「寄宿舎の古釣瓶」の翻案唱歌「楚山楚水」が存在している。

この表は筆者が作成したものである。表1で言及した日本の唱歌の出典をまとめて年代順に示す。所蔵を書いていないものは国立国会図書館の蔵書である。

文部省音楽取調掛編纂『小学唱歌集』初編、1881年、3頁、5頁、11頁、15頁。
文部省音楽取調掛編纂『小学唱歌集』第二編、1883年、2頁、12頁。
文部省音楽取調掛編纂『幼稚園唱歌集』全、1887年、1～2頁、7頁。
大和田建樹・奥好義共編『明治唱歌』第二集、中央堂、1888年、22頁。
東京音楽学校編『中等唱歌集』大日本図書、1889年、4～5頁。
納所弁次郎編、上真行閣『日本軍歌』博文館、1892年、16～17頁。
奥好義編『儀式唱歌：附・祝日大祭日唱歌』寛裕舎、1893年、14～15頁、22～23頁。
山田源一郎編『大捷軍歌』第三編、十字屋、1896年、訂正四版、8～9頁。(横浜市立図書館所蔵)
大和田建樹『地理教育鉄道唱歌』第一集、開成館、1900年、1～33頁。(神奈川県立図書館所蔵)
大和田建樹作歌、開成館編集所編纂撰曲『春夏秋冬散歩唱歌〔生徒行軍唱歌〕』、三木佐助出版元、開成館、1901年、1頁。(梅花女子大学図書館所蔵)
東京音楽学校編纂『中学唱歌』東京音楽学校、1901年、再版、歌詞(1～25頁)、曲譜(1～21頁)。(神奈川県立図書館所蔵)
山田源一郎編『女学唱歌』第一集、東京共益商社、1901年、二版、6～7頁。
鈴木米次郎編『日本遊戯唱歌』第三編、十字屋、1901年、8～9頁。
鈴木米次郎編『日本遊戯唱歌』第四編、十字屋、1901年、18～19頁。
小山作之助編『新撰国民唱歌』第五集、開成館、1901年、59～60頁。
納所弁次郎・田村虎蔵共編『教科適用幼年唱歌』四編下巻、十字屋、1902年、8～9頁。(神奈川県立図書館所蔵)
鈴木米次郎編『中学唱歌集』上巻、十字屋、1902年、6～7頁。(神奈川県立図書館所蔵)
鈴木米次郎編『中学唱歌集』下巻、十字屋、1903年、39頁。(神奈川県立図書館所蔵)
大和田建樹作詞、小山作之助作曲『国民唱歌日本海軍』開成館、1904年、1～8頁。(神奈川県立図書館所蔵)

表2 中国人の編纂した代表的な唱歌集と日本曲（1904年～1911年）

	唱歌集の書名	出版情報	詳 細	日本の唱歌の メロディーを 借用した曲数 ／総数
1	『学校唱歌集』初集 ^{※1}	沈心工編、出版社不明、1904年。	楽譜あり	4／23 ^{※2}
2	『教育唱歌集』	曾志忞編者兼発行者、1905年、増訂四版（1904年初版）。	楽譜あり	20／26
3	『小学新唱歌』	編者不詳、上海新学会社、1905年、増訂再版（1904年初版）。	楽譜無し	0
4	『学堂歌浅积』	張之洞撰・闕名浅积、出版社不明、1905年。	楽譜無し	0
5	『音楽学』 （師範教科叢編第十四種）	湖北師範生編、湖北学務処、1905年。	楽譜あり	37／42
6	『国学唱歌集』	李叔同編、中新書局国学会、1906年、再版。	楽譜あり	未詳
7	『中学唱歌集』	辛漢編、上海普及書局、1906年。	楽譜あり	21／34
8	『音楽 体操（附參觀筆記）』	江蘇師範生編、江蘇寧属・蘇属学務処、1906年。	楽譜あり	未詳
9	『新選学校唱歌三百首』	陌南学堂編集部編、古今図書局営業部、1906年。	楽譜10曲	未詳
10	『学校唱歌集』二集	沈心工編、出版社不明、1906年。	楽譜あり、原曲を明記している。	11／14 ^{※3}
11	『新中国唱歌』三集	金一編、上海宏文館、1906年。	楽譜あり、原曲名は明記されていないが、どここの国の曲かは記されている。	11／19
12	『表情体操教科書：又名唱歌遊戯』	徐紹曾・孫揆合編、揚墨林校閱、上海科学書局、1907年。	楽譜あり	未詳
13	『蒙養院小学堂唱歌集』	亜雅音楽会編、大日本図書、1909年。	楽譜あり	5／28

※1 現時点では『学校唱歌集』初集と二集の所蔵を筆者は確認できていないが、その中に収録されている日本の唱歌のメロディーを借用した中国語の唱歌の数については、高婷の『近代中国における音楽教育思想の成立——留日知識人と日本の唱歌』（慶應義塾大学出版会、2010年）を参照した。

※2 同前、249～252頁。

※3 同前、272頁。

この表は筆者が2023年10月までの調査によって作成したものである。清末の唱歌集の目録は中国芸術研究院音楽研究所編『中国音楽書譜志：先秦～1949年音楽書譜全目』（人民音楽出版社、1994年、二版増訂本、13頁）を参照した。